

水していたことが窺える。本遺跡の約3km下流に立地する永井遺跡や中村遺跡・乾遺跡（第57図）では、縄文時代後期～晚期の土器を含む流路ないし氾濫堆積物の最上部で、弥生時代前期頃の遺構・遺物が検出されている（伊沢・鷹田・真鍋1987、渡部編1990）。

以上、調査区内において認められた堆積物の累重様式と本遺跡および周辺に存在する考古遺跡の発掘調査結果から、金倉川左岸下流域に立地する四国学院大学構内遺跡や永井遺跡周辺の扇状地面は、縄文時代後期～晚期頃に形成されたことが推定される。

③層より上部には、中世以降に形成された耕作土である②層が累重している。②層は、氾濫堆積物を母材とする主にシルト質砂からなる堆積物で構成されている。②層の層厚を考慮すると、本層準が形成された時期には、下位に存在する③、④層に比較して堆積速度が極めて小さかったことが窺える。本遺跡の下流側に位置する永井遺跡や中村遺跡、乾遺跡などでも、弥生時代前期以降の堆積物の累重様式について同様の傾向が確認されている（伊沢・鷹田・真鍋1987、渡部編1990）。これらのことから、縄文時代後期～晚期頃に形成されたと推定される四国学院大学構内遺跡や永井遺跡周辺の扇状地面では、弥生時代前期頃に離水し、その後安定した堆積環境が長期間にわたって形成されていたことが想定される。このような堆積環境下では、当時の地表面上において土壤発達が認められるが、今回の調査ではこれに対応するような古土壤を確認することが出来なかった。しかし、弥生時代～古代の構造には、土色および粒度組成から土壤に由来すると判断される黒褐色～灰黒色を呈する砂質堆積物が充填されているのが確認された。のことから、弥生時代から古代の構成時には、地表面上に発達した土壤が存在していたことが示唆される。

以上、調査区内に存在する堆積物の特徴と本遺跡および周辺に存在する考古遺跡の発掘調査結果から、四国学院大学構内遺跡や永井遺跡周辺が立地する扇状地面上では、弥生時代以降～古代に発達した土壤が形成されるような安定した土地条件下において人間活動が行われていたことが推定される。

② 炭化材の樹種同定結果から推定される周辺の古植生

分析試料の大半を占める住居内の竈や焼土坑から出土した炭化材は、燃料材に由来する可能性が高い。これらの炭化材には、合計6種類の木材が認められた。このうちクヌギ節、コナラ節、アカガシ亜属は、薪炭材としては国産材の中でも特に優良な種類の一つとされる（平井1979）。いずれも重硬で強度の高い材質を有することから、燃料材として利用した場合には熱量が高く、火持ちが良いことが推定される。シャシャンボも比較的堅い材質を有することから、燃料材等には堅い材質の木材が選択されていたことが推定される。

ピット137から出土した炭化材は、すべて針葉樹の複維管束亞属（ニヨウマツ類）に同定された。溝内から検出された炭化材は、保存状態が悪く同定不可能な試料1点とコナラ属コナラ亜属クヌギ節の5点に同定された。

確認された種類のうち、アカガシ亜属とシャシャンボは、暖温帯常緑広葉樹林（照葉樹林）の構成種である。アワブキ属の仲間も暖温帶に分布する種が多く、また、クヌギ節とコナラ節も暖温帶林の二次林などで普通に認められる種を含んでいる。現在の生態性からみて、種類構成に矛盾はなく、以下に示す古植生調査成果を考慮すると、本遺跡周辺に分布していたと推定される。

丸龟平野においてこれまでに実施された花粉分析および大型植物化石分析から、本遺跡周辺では、縄文時代後晩期～弥生時代にかけて、アカガシ亜属を中心とする暖温帯常緑広葉樹林（照葉

樹林)が形成されていたことが推定される(古市1990、パリノ・サーヴェイ1997・1998・1999)。

当該期の森林植生には、マツ属・スギ属・ツガ属・マキ属の針葉樹、ヤマモモ属・クマシデ属・アサダ属・コナラ属・クスノキ科・シノキ属・ニレ属・ケヤキ属・エノキ属・ムクノキ属などの広葉樹が構成要素として認められている。弥生時代以降も、丸亀平野周辺では、暖温帶性の森林植生が存在していたことが花粉分析結果などから窺える。但し、弥生時代以降になると、丸亀平野上に立地する考古遺跡では、マツ属が増加・多産していく傾向が認められるようになる。

マツ属が多産する時期は、分析が実施された考古遺跡でそれぞれ異なっており、高松平野に位置する林・坊城遺跡で弥生時代後期～古墳時代初頭、丸亀平野の川西北七条Ⅰ遺跡で弥生時代末、川津川西遺跡で9世紀、下川津遺跡で平安時代以降となっている(パリノ・サーヴェイ1990・1993・1997・1999)。また、本遺跡の下流側に位置する永井遺跡では、縄文時代後期の河道堆積物中にマツ属が比較的高率に検出される試料が複数存在している(古市1990)。このような差異は、周辺の森林に対する人間による植生干渉の開始時期や活動のほか、堆積環境変遷や地形発達史に応答する局地的な植生や花粉化石群集の形成過程の違いに起因している可能性が考えられる。今後、各遺跡で確認されているマツ属花粉の多産時期については、遺跡およびその周辺の精度高い古環境復元や遺跡形成過程の検討をふまえ、より詳細にその歴史的評価を行っていくことが必要であると考えられる。

本遺跡に近接した地点では、残念ながら分析試料の大半を占める6世紀～7世紀代にかけての古植生のデータが得られていない。丸亀平野の東部に位置する川西北七条遺跡・川津川西遺跡・下川津遺跡において確認されている弥生時代末～古代までの花粉分析結果からは、これらの遺跡周辺にカシーナラ林を中心としてコウヤマキ、スギ、イチイ科・イヌガヤ科・ヒノキ科、マツ属などの針葉樹が混在する林分が想定される(パリノ・サーヴェイ1990・1997・1999)。今回、同定を行った炭化材の樹種は、周辺の遺跡から推定される丸亀平野およびその周辺における当該期の古植生において、普通に見られる種類である。このことから、今回分析を行った大半が燃料材と推定される炭化材は、遺跡周辺に生育していた樹木を利用していたものと想定される。

③ フイゴ羽口の付着物について

今回の調査では、フイゴの羽口先端部に認められた溶融物の材質を非破壊で調べるために、蛍光X線分析法のうち、極表面層における含有元素を特定する方法を採用した。本方法は、化学構造に関する情報を得ることができず、また、検出され得るX線強度はある深さまでの元素情報が複合されたものであることから、複数の元素が検出された場合、それらの元素が均一に存在しているのか、不均一(膜状など)に存在しているのかを判別することが難しい。本測定に使用した装置は、10mmφのコリメータを使用した下面照射型の装置であることから、ターゲットとした緑灰色溶融部の測定においては測定部位周辺の元素も検出されることなど、測定結果の解釈にあたって種々の制限が生じるが、今回は、ターゲットとする融解物と素地部とのスペクトル対比を行うことによって、緑灰色溶融部の融解物における特異元素を判別することとした。

測定の結果、緑灰色溶融部の融解物では鉄の検出強度(cps)が特に高い傾向が認められたほか、カルシウム、マンガン、カリウムについても検出強度(cps)が高い傾向が見られた。したがって、融解物中には主として鉄が多く含有されることが指摘できる。鉄は基本的には酸化状態で黄、赤、褐、黒色を、還元状態では青、緑色を呈するが、詳細な発色機構は原子価、配位数、電子遷移状

態によって規定される。今回の緑灰色溶融部の呈色要因に関しては、鉄の検出強度が高ったことから、鉄が関与している可能性がある。

今後の課題としては、緑灰色溶融部の化学構造については微小部X線回折等により結晶構造に関する情報を得ることが可能である。緑灰色融解物中にどの程度のオーダーで鉄が存在するかについては、微小プローブに対応した蛍光X線分析装置やEPMAなどにより、測定ターゲットに対して照射径を絞り込んだ測定が有効である。また、呈色要因については、呈色イオンを鉄に限定したならば、メスパウア一分光法による鉄の状態分析も有効かと思われる。

第4章 引用・参考文献

- 長谷川修一・斎藤 実 (1989) 讃岐平野の生い立ち第一瀬戸内累層群以降を中心に一、アーバンクボタ, No.28, p.52-59.
- 平井信二 (1979) 木の事典 第2巻、かなえ書房。
- 古市光信 (1990) 善通寺市永井遺跡花粉分析結果報告、「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 水井遺跡(附編・観察表・写真図版編)」, p.803-813, 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財センター・日本道路公団。
- 伊沢肇一・薦田耕作・真鍋昌宏(1987)「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 中村遺跡 乾遺跡 上一坊遺跡」, 180p, 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財センター・日本道路公団。
- 国土地理院地理調査部 (1986) 1:25,000 土地条件図 丸亀、国土地理院。
- 齊掛俊夫 (1991) 讃岐平野・備讃諸島、「日本の地質四国」、須鎌和己編, p.12-18, 共立出版。
- 松田順一郎 (1996) 北島遺跡の耕作地と古環境—宍屋川南部流域植付ポンプ場土木工事に伴う北島遺跡第1次発掘調査報告書一, (財)東大阪市文化財協会, 157p.
- 松田順一郎 (1999) 瓜生堂第40次調査地における河川堆積作用の変化、「瓜生堂・若江北・山賀遺跡発掘報告書—電気工事予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の調査報告」, p.93-105, (財)東大阪市文化財協会。
- 松田順一郎 (2000) 八尾市小阪合遺跡における弥生時代～古代の河川堆積作用と地形発達、「小阪合遺跡一都市基盤整備公団八尾団地建替えに伴う発掘調査報告書」, (財)大阪府文化財調査研究センター, p.259-276.
- Miall,A.D. (1996) The Geology of Fluvial Deposits:Sedimentary Facies, Basin Analysis, and Petroleum Geology. Springer, 582p.
- 森下英治 (1998) 立地と環境、「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 龍川五条遺跡」, p.10-28, 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財センター・日本道路公団。
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1990) 下川津遺跡における花粉・珪藻分析委託報告、「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 下川津遺跡 第2分冊一」, p. 479-518, 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財センター・日本道路公団。
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1993) 花粉分析とプラント・オパール分析、「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 林・坊城遺跡」, p.239-263, (財)香川県埋蔵文化財センター。
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1997) 川西北七条Ⅰ遺跡周辺の古植生、「四国横断自動車道建設に

- 伴う埋蔵文化財発掘調査報告 三条黒島遺跡 川西北七条Ⅰ遺跡」, p. 301-309, 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財センター・日本道路公団。
- パリノ・サーヴェイ株式会社 (1998) 龍川五条遺跡の古環境復元, 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 龍川五条遺跡」, p.248-262, 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財センター・日本道路公団。
- パリノ・サーヴェイ株式会社 (1999) 川津川西遺跡の花粉分析報告, 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津川西遺跡 飯山一本松遺跡」, p.247-253, 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財センター・日本道路公団。
- 渡部明夫編 (1990) 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 永井遺跡(本文編)」, 180p, 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財センター・日本道路公団。

第5章 まとめ

第1節 遺構について

今回の調査では弥生時代後期から近代に至るまでの多様な遺構を検出した。主要な遺構は7世紀前半から8世紀初頭のものである。それらの時期別変遷を第Ⅰ期から第Ⅴ期に区分し、簡潔に述べる。

第Ⅰ期：弥生時代後期

竪穴住居など集落に直接かかわる遺構は確認できていない。確実な遺構としては溝2条（溝3・4）のみである。他にも遺物を伴わないものの、溝2条、土坑（木棺墓）1基がこの時期の可能性がある。

これらの遺構の性格を推測する上で有効なものに、溝3がある。溝3は調査区を北西—南東方向に横断する。幅約2m、深さ0.5mで、断面V字状で非常に深い。溝内からは弥生土器が出土した。この溝は旧練兵場遺跡などで検出されている灌漑用と推測される溝と規模・形状が近似している。おそらくこの溝3が灌漑用の幹線水路で他の溝は導水する水路であった可能性が高い。南側に遺構がほとんど広がらないことから、集落域は北側の現在の市街地周辺に位置しており、この辺りは生産域であったと考えられる。水田などが遺構として検出されないのは、7世紀代に集落として機能したときに畦などが削平されたためであろう。この時期の遺構は、いずれも調査区の北側に位置している。包含層出土の弥生土器も北側を中心に散布しており、この時期の集落が調査区の北側に広がっていた可能性がある。

また、溝5は遺物が全く出土していないが、溝4と近接し、また同一主軸、底部の標高がほぼ同じ高さであることから弥生時代の遺構と推測した。土坑4（木棺墓）についても、遺物が全く出土していない。竪穴住居5（7世紀前半～中葉）によって上部が削平されており、この遺構よりも先行することは確実である。古墳時代の遺構であった可能性も否定できないが、調査区内で古墳時代の遺構・遺物が皆無な状況から、弥生時代の遺構と推測した。

第Ⅱ期：7世紀前半～中葉

遺物の様相1・2に該当する時期。集落が形成される時期である（第63図）。主要な竪穴住居・掘立柱建物、大規模な溝が相次いで出現する。竪穴住居も6基がほぼ同時期に作られる。主軸をほぼ同じくする掘立柱建物1・2・3も作られ、また小規模な掘立柱建物5や柵列1も作られる。集落としての景観が完成したと言えるだろう。ほぼ同時期に条里地割に沿う溝1・2も掘削される。ただし溝2は後述の通り、条里型地割成立前から機能していた用水路であった可能性が高い。竪穴住居1は、溝1によって削平されるが、時期的には若干の差（四半世紀）があるため、溝の掘削に伴って廃絶したと解釈できる。同様に掘立柱建物2も溝2の掘削によって廃絶している。短期間に条里地割に基づいて集落内の建物が計画的に配置・整理が行われたことを示している。溝8は溝2の東側をほぼ平行して流れる。導水路など溝2に関連する遺構であろう。溝11は溝8と一連の遺構と推測する。溝7も溝2に伴う小規模な流路である。

このほかに調査区南端で東西方向に検出した溝13も、この時期の遺構である。調査当初は北側

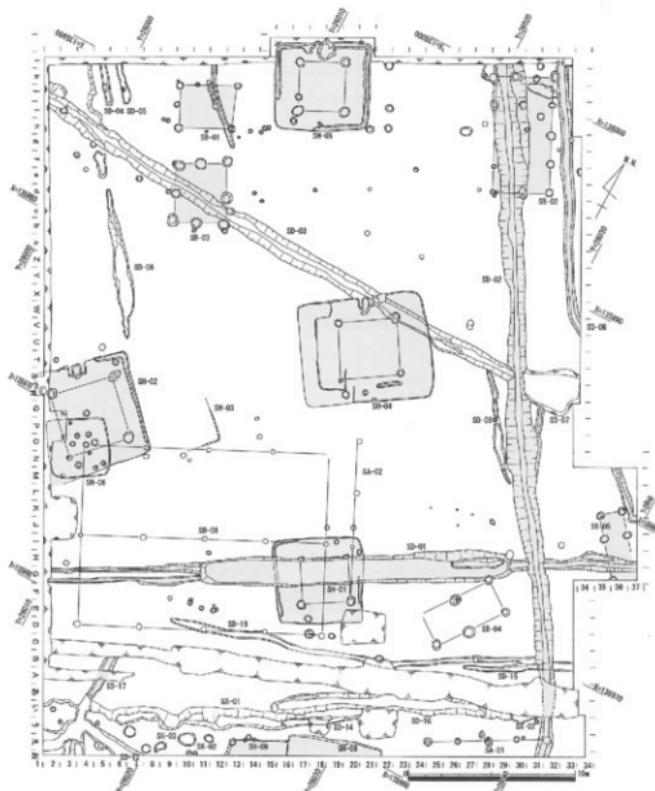
第12表 各遺構時期別消長表

遺構名	第Ⅰ期	第Ⅱ期		第Ⅲ期		第Ⅳ期		第Ⅴ期
	弥生後期	7世紀前半	7世紀中葉	7世紀後半	7世紀末	8世紀初頭	8世紀前半	近代
豎穴住居1								
豎穴住居2								
豎穴住居3								
豎穴住居4								
豎穴住居5								
豎穴住居6								
豎穴住居8								
豎穴住居9								
掘立柱建物1								
掘立柱建物2								
掘立柱建物3								
掘立柱建物4								
掘立柱建物5								
掘立柱建物6								
柵列1								
柵列2								
溝1								
溝2								
溝3								
溝4								
溝5								
溝6								
溝7								
溝8								
溝9								
溝11								
溝12								
溝13								
溝14								
溝15								
溝16								
溝17								
溝19								
土坑1								
土坑2								
土坑3								
土坑4								
不明遺構1								
不明遺構2								

■ : 該当する時期

□ : 可能性がある時期

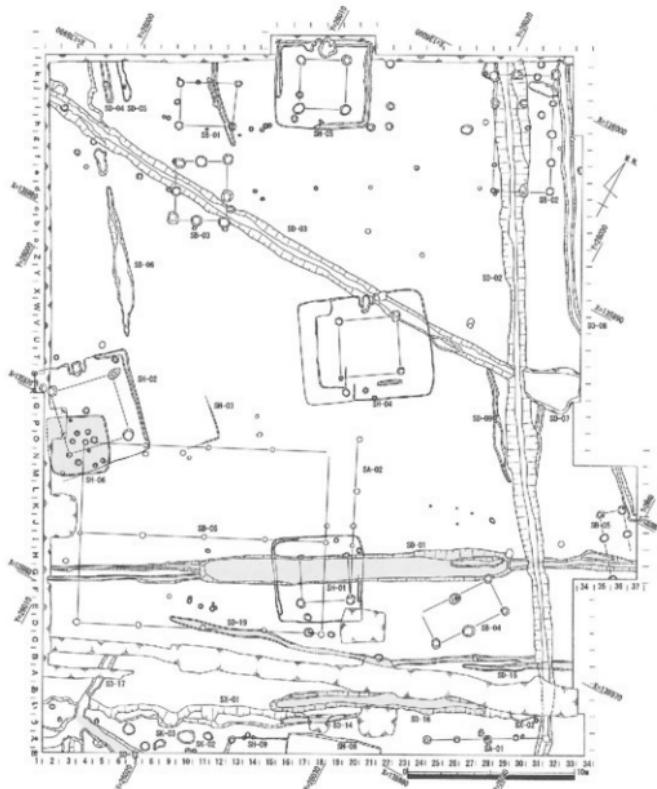
の立ち上がりが削平された溝と認識していたが、整理段階になって微高地を段状に整形した遺構、すなわち不明遺構1の一部であると理解できた。段状に整形した時期は、遺構直上（調査当初は溝内埋土と認識した土層）の遺物からこの時期と考える。この遺構周辺は調査時でも若干（約0.3m）北側と比べて高くなっている。この時期には微高地を削平するなど、条里地割りの確立に付随して開発が行われていたとも解釈できる。併せて不明遺構1（旧名称溝13含む）には、もう一つの可能性が指摘された。隣接する第Ⅲ期の遺構、溝14・16、不明遺構2などと一連の遺構と捉えて、条里地割りである溝1の南側約9.0mに平行して流れる溝とする解釈である。この場合はこの両側の溝に挟まれた部分の解釈として、余剰帶や道であった可能性が指摘できる。この解釈について付章第1節にて詳述する。



第63図 第Ⅱ期遺構図（1:300） ■…該当遺構

第Ⅲ期：7世紀後半～末

遺物の様相3に該当する時期である（第64図）。明確な遺構としては溝12・14・16が確認できるが、竪穴住居などの建物はほとんどが廃絶する。この時期には集落としての機能はほぼ終息し、幾筋かの溝のみとなっていたと考えられる。竪穴住居は第Ⅱ期でほとんどが姿を消す。唯一、この時期に該当するのが竪穴住居6である。この住居は竪穴住居2の廃絶後、ほぼ同じ位置に築造している。第Ⅱ期の竪穴住居と比較して床面積が狭いこと、炉などの燃焼施設が存在しないこと、上部施設を支える主柱穴が2穴であること、貼床がほとんど確認できない、遺物が全く出土していないことなどから、仮設的な建物であった可能性が高い。溝19は、溝2に接続する東西方向に延びる溝である。埋土の状況から短期間しか機能していなかったと推測する。溝2も遺物の出土はするものの、埋土上層が中心で、第Ⅱ期ほどは機能していなかったと思われる。

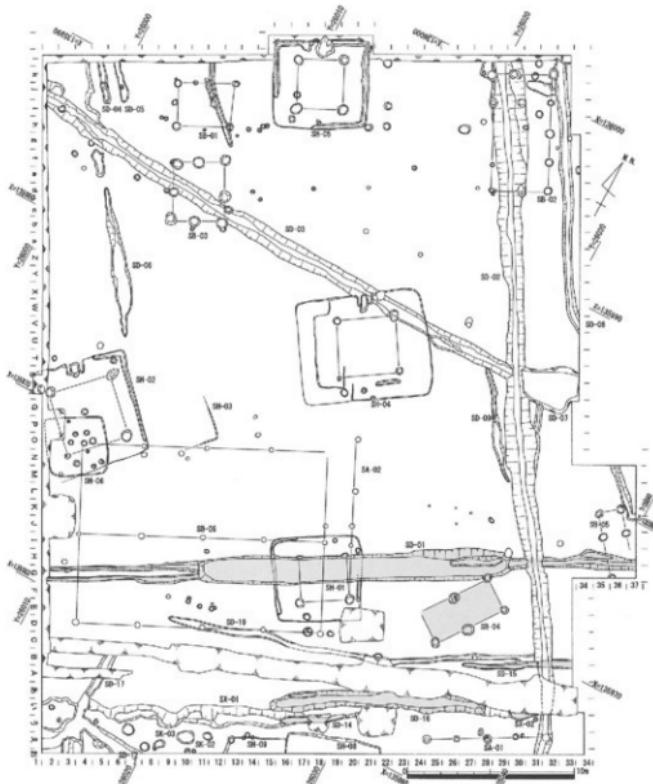


第64図 第Ⅲ期遺構図 (1:300)

■…該当遺構

第IV期：8世紀初頭～前半

遺物の様相4に該当する時期である（第65図）。明確な遺構としては第III期から継続する溝14・15・16のみで、密度もさらに希薄となる。溝14はきわめて小規模なもので、平行して流れる溝16の掘り直しの可能性もある。この時期になると遺物もごく少量しか出土しておらず、集落としての機能はほぼ廃絶していたと考えられる。この時期には条里地割りに伴う坪界溝であった溝1も埋没し始めていたようで、南側の立ち上がりに重複させて掘立柱建物4を構築している。建物は小規模な上、主軸をあわせることもなく、作業小屋程度の性格であったのであろう。



第65図 第IV期遺構図 (1:300) ■…該当遺構

第V期：近代

第IV期以降、古代後半から近世にかけての遺構は全く検出されていない。ただし、上層の包含層からは少量ながら遺物が出土しており、田畠などに利用されていたと推測される。その後、近代に入ると、この場所は旧陸軍の用地として使用されることとなる。この時期の遺構としては掘立柱建物6、柵列2がある。第3章で触れたとおり、柱穴が上層（第II層）で検出されたこと、埋土が他の遺構と異なることから近代の遺構と認識した。掘立柱建物6は2間×4間の大型の建物である。柵で区切られていることなどから、当初、第十一師団騎兵隊の兵舎や厩舎の可能性を想定したが、決定付ける写真や図面は検索できなかった。今後の課題としたい。

小結

簡略ながら時期別変遷について述べてきた。繰り返しになるが、四国学院大学構内遺跡は第II期、7世紀前半から中葉が遺跡の中心であったと考えられる。この時期に竪穴住居、掘立柱建物、大規模な溝が一斉に展開する。そして7世紀後半になると急に終息に向かう。この動向を相前後する時期の周辺遺跡と比較してまとめとしたい。

まず近接する遺跡として、南西約0.3kmの位置に所在する生野本町遺跡があげられる。この遺跡は方形掘り方を有する柵列と条里地割と平行あるいは直交する溝を検出した。報告者はこの溝を条里制施行に係わる区画溝群と評価し、7世紀後半～8世紀前半の時期としている（國木1993）。この遺跡の柵列を掘立柱建物の一部と解釈すると約50m²に復元でき、郡衙など官衙的要素を備えた遺構群と解釈することも可能である（佐藤1998）。一方、四国学院大学構内遺跡ではこの時期の建物で最大の掘立柱建物2でさえも約25m²程度であり、大型の掘立柱建物の基準（40m²以上）には及ばない。散在的な建物配置であることも勘案すると、いわゆる一般集落であったといえる。ただし、一般集落のものとは異質な遺物が出土していることも事実である。この問題は次節で触れることにする。

北西約0.6kmには、仲村廃寺（伝導寺）が所在する。仲村廃寺からは外区に鋸歯紋を施した古式の川原寺式軒瓦が出土しており、7世紀後半から8世紀前半頃までの限られた時期に存続していたとされている。その後の8世紀中葉には、普通寺に移転していたようである。このことは仲村廃寺と同范の瓦が現在の普通寺境内から出土することからも窺える。

仲村廃寺を含む一帯は、旧練兵場遺跡（群）と呼称されている約50haに及ぶ大規模集落遺跡が広がっている。この遺跡は近年調査が進められており、除々にではあるが様相が明らかになってきている。遺跡の中心は弥生時代である。四国学院大学構内遺跡の時期前後の遺構としては、7世紀中葉を下限とする溝や8世紀で埋没する溝などが検出されている（森下2003）。このように本遺跡と併行する時期の遺構は認められるものの建物など生活の痕跡は現段階では確認されていない。旧練兵場遺跡は未だ全体の数%程度しか調査がされていないため、今後、新たに検出される可能性も否定できない。

高松自動車道建設に伴って調査が実施された金蔵寺下所遺跡は、本遺跡の北東約2.2km、金倉川西岸の狭い微高地に立地する（廣瀬1994a）。この遺跡の古代の遺構については、7世紀末から8世紀初頭にかけての掘立柱建物や溝などが検出されている。この時期に従前の建物構成を維持したまま、集落が条里型地割に規制されて再編成されたとされている（森下1997）。

稻木遺跡も高松自動車道建設に伴って調査が行われた。本遺跡の北東約2.0kmに位置する。この

遺跡では、7世紀後半～8世紀前半の掘立柱建物群が検出された。金蔵寺下所遺跡と同様に条里地割によって集落が再編されている。

以上のように、本遺跡周辺の古代における遺跡の消長を概観すると、そのほとんどの遺跡が7世紀後半段階から集落が成立している。丸亀平野でこの時期に集落の再編が行われたことを意味している。のことと本遺跡の集落機能の終焉とは無関係ではないだろう。この要因について現段階では明確な回答を持ち得ないが、丸亀平野でこの時期に行われた条里型地割の整備と連動していることは間違いないだろう。ただし、この磁北から約30°西偏する条里型地割は丸亀平野の地形傾斜方向とはほぼ一致しており、古墳時代にはすでにその原形が完成していた（大山1988）。このことは本遺跡の溝の時期からも推測できる。本遺跡はこの地域の6世紀代の遺跡と、7世紀後半以降に寄一的に展開する遺跡との間をつなぐ良好な資料と言えるだろう。

第2節 遺物について

出土土器の年代

各遺構から出土した土器・土製品を概観すると弥生時代の遺物を除いては、7世紀前半から8世紀初頭まで継続した年代の遺物が出土している。当地でこの期間継続して集落が営まれていたことが窺える。香川県内の古代消費地遺跡における遺構の存続時期をみると、7世紀末から8世紀初頭および8世紀代の遺跡は多くみられるが、7世紀代を通じての遺跡は、坂出市下川津遺跡（大久保ほか1990）等があるものの数が少ない。そのため当遺跡は、空白期である7世紀代の集落遺跡の状況を知る上で貴重な資料となり得るであろう。出土遺物からみた各遺構の変遷は、遺構の切り合い等からみた各遺構の相対関係と合わせて、「第5章第1節」で触ることとする。

土器の組成

出土した土器・土製品はその大半が須恵器で、土師器は煮炊具が少量出土する程度である。須恵器の器種構成は供膳具が主で貯蔵具が次に続く。このような状況は香川県下における他の古代集落遺跡の場合と比較して、ほぼ同じ様相を呈している。

土器の供給元

香川県下では7世紀から8世紀初頭にかけて須恵器窯は、香川県南西部の辻窯跡群、北西部の三野窯跡群、中部の十瓶山窯跡群、東部の志度末窯跡群などが存在する。8世紀以降の十瓶山窯跡群へ一元化する前段階であり、大小様々な地域窯が散在していた時期といえる。当遺跡出土の須恵器に総じていえることは、胎土が砂粒を含み粗く、焼成が甘く軟質である点である。このような特徴は、供給元である窯跡の生産土器の特徴を表していると考えられる。十瓶山窯産の須恵器は、均質な素地を持ち砂粒は少量しか含まず焼成は良好なものが多いことから、十瓶山窯産である可能性は低い。三野窯産の須恵器は、砂粒を多く含み素質な素地をもち焼成は十瓶山窯産製品よりも不良である。須恵器窯の供給分布図を勘案すると土器の供給元は、三野窯跡群もしくは近隣の中讃・西讃地域の小規模窯であったと推測する。香川県西部の窯跡は発掘調査がほとんどされておらず、その実態が不明確な部分も多いので今後発掘調査資料の追加を待って検討することとしたい。

初現期の壺C身について

ここで当遺跡から出土した壺C身について触れておく。溝1より出土した壺C身の中には、初現期のものに近いと考えられる壺部が深めで高台が高く外側に踏ん張る個体が含まれる（第66図）。このような初現期の属性を備えた壺C身は多くないが、打越窓跡や志度末窓跡・下川津遺跡等で若干散見される。初現の時期に関する一括りの高い資料が少ないとことなどから時期を特定させることは困難であるが、様相2と様相3の間（7世紀中頃～後半）に位置するものと比定される（註1）。

また初現期の壺C身にはその特徴として、体部中位に段状の沈線あるいは稜線を残す。この沈線あるいは稜線の系譜は、形態的特徴から台付塊に求められると想定されている（佐藤1999、信里2002）。

当遺跡の資料（52・53・54）は壺部体部下半で強い屈曲がみられ、これが沈線・稜線の名残ではないかと思われる。

壺C身にセットとなる蓋としては壺C蓋が該当する。初現期の壺C身にセットとなる壺C蓋は型式的に、口縁端部にかえりの付く形態であると考えられるが、当遺跡ではかえりの付く壺C蓋が殆ど出土していない。破片が多いため、かえりの部分のみ出土している個体で壺Cのものを壺Bでカウントしている可能性も考えられるが、それらを考慮しても壺C身に比べ壺C蓋の割合が少ない。初現期の壺Cはその存続時期が短く、壺C蓋を伴わない状況が想定されるが、初現期壺Cの様相については、良好な資料の追加を待って検討することとした。

特筆すべき遺物

当遺跡から出土した遺物のなかで特異性のあるものとして、土師質土玉・フイゴの羽口・須恵質円面鏡・瓦が挙げられる。

土師質土玉は竪穴住居竈中から出土しており、住居廃絶時に意図的に廻棄されたものと考えられる。このような風習は古墳時代にもみられ、篠川龍一氏は旧練兵場遺跡で検出した古墳時代の竪穴住居竈中から出土した土玉を「竈の祭祀」として指摘している（篠川1986・1989）。同様の風習が7世紀にも継続していることは興味深い。

フイゴの羽口は、図化した溝2（115）をはじめ、竪穴住居5・溝2・溝8・溝16より破片が出士している。また関連遺物と考えられる鉄屋が溝2・溝8から、砥石が竪穴住居5から出土した。出土点数が少量であり周囲に軌跡構造も確認されなかったことから、精鍛・鍛冶などの製作集団による工房が存在していた可能性は低い。おそらく、集落内での日常的な道具の製作など小規模に操業されていたと推測する。

遺物からみた遺跡の性格

円面硯や瓦の存在は、当遺跡の性格を知る上で非常に重要である。硯は当時ある程度高位の階層の者しか所持しえなかつたものであろう。また瓦は、平瓦・十六葉素弁蓮華文軒丸瓦とともに仲村廃寺出土瓦と同範である。出土個数が数点と少なく、当地に瓦葺の建物が建立されていたとは考えにくい。屋根瓦としてではなく何らかの理由で当遺跡に搬入されたのであろうが、いずれにしても当遺跡が仲村廃寺と関係があつた可能性が高い。これらのことから当遺跡あるいはその周辺に、一定の勢力を持ち仲村廃寺と関係のある集団の拠点があつたことが窺える。

註1 信里氏は、「最古段階の属性を備えた杯D（本報告杯C）形式をもつ段階の存在が想定されるが、様相2期に含まれるものかあるいは様相3期が細分されるものなのは現時点では不明である」、「杯D形式の祖形と考えられる台付椀との検討から、様相3期の小谷窯に先行し、最古段階の杯D形式をもつ様相が存在する可能性もある」としている（信里2002）。

第6章 付 章

第1節 条里遺構と南海道

はじめに

今回の調査で調査区を縦横断する溝を検出した。この溝は磁北から30°西偏する大規模なもので、いわゆる条里型地割と推定される遺構である。先学の研究を踏まえつつ、実態としてこの遺構が条里型地割に伴う坪界溝であるのか、また付近を東西に走るとされる南海道の可能性について、調査成果を踏まえて若干検討を行ってみたい。

丸亀平野の律令期土地政策についての研究歴史

大宝元（701）年に制定された『大宝令』により、国家体制とともに地方制度もかなりのスピードで整備されていった。『大宝令』はあくまでも規定であるが、畿岐においても実際に郡・里（郷）の編成・整備が進んだことは間違いない（金田1987）。併せて官道（南海道）や駅家、官衙などの諸施設が整えられていったと考えられる。

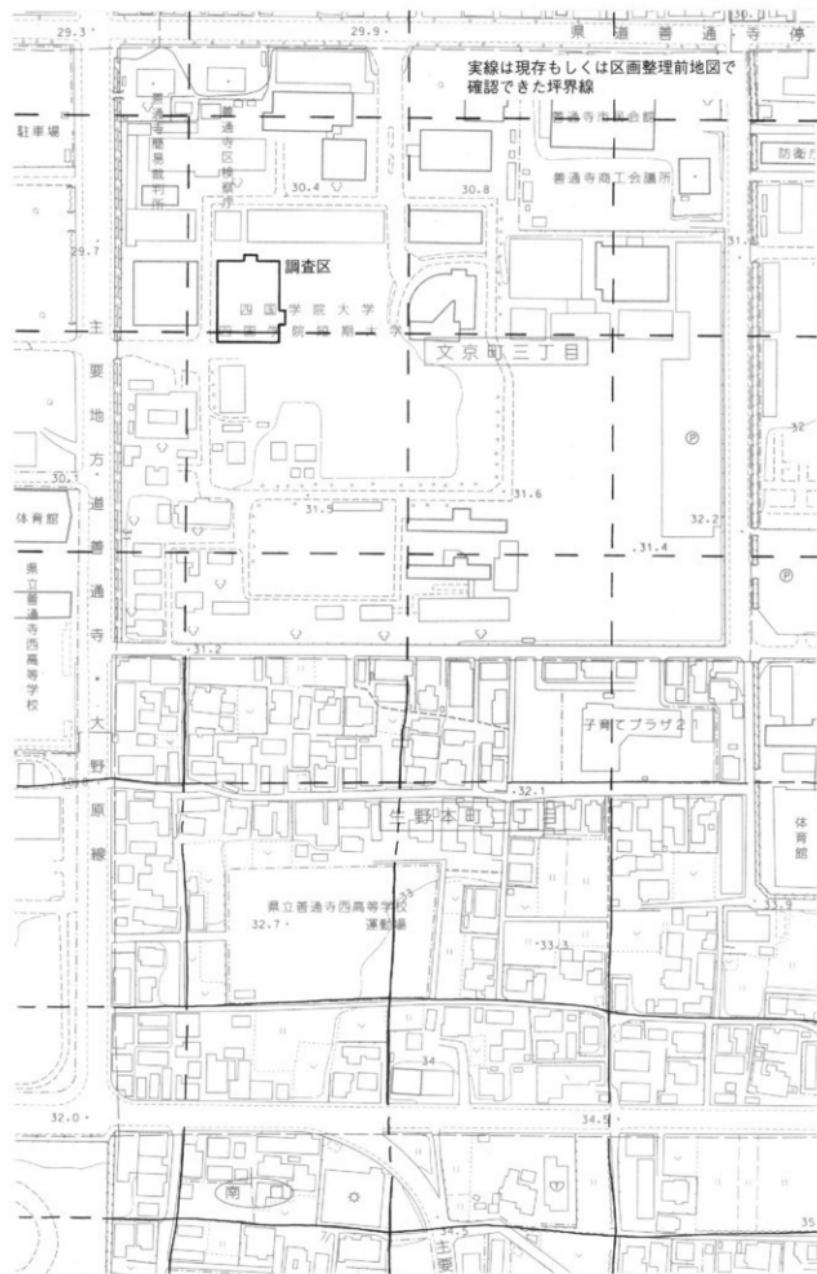
本遺跡が所在する丸亀平野では、現在もなお古代の地方制度の整備が原形と考えられる条里型地割が良好に残存している。そのため、歴史地理的な検討が古くからなされてきた地域である（野中1992・金田1987、1989、1993・宮武1995など）。また、高速道路建設などの大規模発掘調査によって条里型地割が遺構として検出される例も増加してきたため、考古学的な検討も行われるようになってきた（森下1997）。一方、地名・字名などから駅家や都衙などの官衙施設の比定も行われてきている。

各研究者によって若干の条坊のいずれは生じているものの、丸亀平野では磁北から30°西偏する地割が残存していること、普通寺市域を南海道が通過しているということは、どの研究者も見解に相違はない。

調査成果の検討

調査区において条里型地割に平行する、もしくは直交する遺構としては、溝1および溝2があげられる。これらの溝はいずれも若干角度を異としているが、誤差の範囲であろう。また溝1の南側にはほぼ平行して存在する、溝状の遺構群、すなわち不明遺構1（溝13）・溝14・溝16も併せて検討の対象とする。まず実際に調査地内の溝が条里型地割と判断できるか否か、また判断できる場合はどの位置に該当するか検討した。第67図は調査区をめ込んだ現在の『普通寺市都市計画図』（S=1:2,500）を元に、現存する条里型地割を基準とした土地区画（軽車道・畦道・用水路）もしくはその痕跡をめ込んだものである。四国学院大学構内遺跡周辺は市街地化が進んでおり、歴史地理学的手法では条里型地割の復元は困難と推測していたが、部分的に痕跡が残存している箇所が多くあり、不完全ながら復元することができた。これに調査区をめ込み、坪界溝とはほぼ合致することを確認した。すなわち、東西方向の溝1が里境の溝であったことが確認できた。ただし1里が109mと仮定すると若干距離がずれる。また、南北方向に溝2がずれて検出されており、この遺構が条里型地割に伴う遺構であるとは言い切れなかった（後述）。

また周辺地域で発掘調査により検出した条里型地割の遺構（森下2003）などを元に、さらに大



第67図 調査区周辺条里地割図① (1:2,500)

第68圖 調査區周辺条里地割図2 (1 : 10,000)



縮尺の地図にはめ込んだ（第68図）^①。これによると、東西方向の溝1が多度郡六里と七里の境の溝であったことが確認できる。また、南北方向の溝2は多度郡三条と四条の境から約170m、一坪西側の坪界溝からも約60m東側にずれていることが分かる。主軸の方位が同一であることから、条里型地割が完成する以前に流れていた水路であった可能性が高い。なお第68図で検討すると、第69図と比べ約30mずれるが、この誤差は歴史地理学的検討と考古学的検討の手法の相違によるものであり、現段階での限界といえる。

これらの検討から今回の調査で検出した遺構のうち、確実に条里型地割に伴うものとしては、溝1のみと判断できる。

次に溝1の南側にはほぼ平行して存在する、不明遺構1（溝13）・溝14・溝16について検討を行う。これらの中には東西に接続して続いている、一連の溝状遺構と解釈することが可能である。また、溝1との明確な時期差は想定できず、平行して流れていた可能性も否定できない。先述の通り溝1は多度郡六里と七里の里境と考えられる、若干北側へずれるため、南側の一連の溝状遺構の方が、より机上の推定ラインに近い。金田章裕氏の歴史地理学的な検討によると、南海道は鶴足郡六里・七里境、那珂郡十三里・十四里境、多度郡六里・七里境を直進的に西進し、普通寺市香色山南麓にいたる直線道路を想定している（金田1987）。なお香色山南麓に達した南海道は、大日経を越えて三野郡・刈田郡へと続いている。また讃岐には引田・松本・三谿・河内・甕井・柞田の6箇所に駅家が設置されたとされているが、このうち甕井の駅家を普通寺市街地付近に比定する説もある。

以上の想定を今回検出した遺構と照合させることによって、この解釈が妥当なものであるのか検証してみたい。

まず溝1南側の溝状遺構群を一連の遺構と捉えたとき、その幅が問題となる、幅は東側で約9m、中央付近で約8.5m、西側で約8.5mと、ほぼ平行している。この幅は、県内で検出された南海道と推定される南海道駅跡推定地の幅約12m（山本1992）、三谷中原遺跡の幅約10m（香川県教委2002）には及ばないものの、他の伝路が幅6m程度で検出されていることから、この遺構が南海道であった可能性は否定できない。

おわりに

非常に雑駁ながら、本遺跡から検出された遺構の検討を行った。これにより調査当初、条里の坪界溝と想定していた溝2が推定ラインから大きく外れ、条里型地割成立以前の水路であった可能性が判明した。また溝1が、単なる坪界溝ではなく多度郡六里と七里の里境、そしてこの部分に沿って設定されたとの説がある古代南海道の可能性をも指摘することができた。

ただし、これらはいずれも調査時において明確な認識があった訳ではなく、論じた内容はあくまでも状況証拠に過ぎない。また現在残存している坪境とも若干異なっているのもまた事実である。本節では、他分野に比べて遅れている感が否めない考古学的成果に基づき、可能性を指摘したに過ぎないが、讃岐の条里型地割・南海道の研究の一助となれば幸いである。

① 第68図は森下英治氏作成の未公表図面に筆者が加筆した。ご提供頂いた森下氏に深謝申し上げます。

第2節 讃岐における古代移動式竈について

はじめに

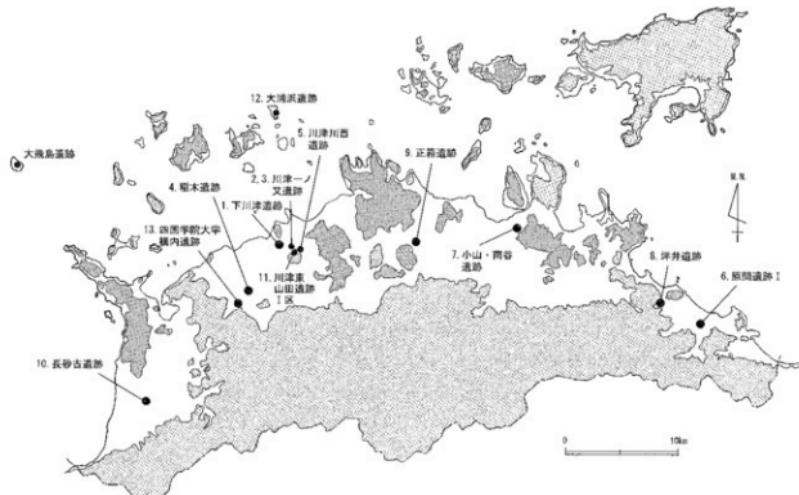
当遺跡溝1からは土師質移動式竈が出土した。完形ではないものの、各部位の形態がほぼ解かる状態で残存している。そこで本章では県内の他遺跡の出土資料と比較検討し、香川県下における古代移動式竈の把握に努める。

対象資料について

香川県内の遺跡で出土した土師質移動式竈を集成した（第70・71図・第13・14表）。集成資料の時期は6世紀から中世に及ぶ。そのうち本稿では6世紀から10世紀までの資料を中心に分類を行った。遺跡数は13遺跡である。移動式竈の年代は供伴遺物から割り出した。

形態式分類

出土資料の大半は破片で部分的にしか残存していないため、詳細な形式分類は不可能である。よってここでは、①掛口口縁部の形態、②底の形態、③炊口の形態の3点に重点を絞った。分類の方法は、近澤豊明氏が西日本の資料を中心に移動式竈の形態分類・型式変遷・出土分布について研究されており（近澤1992）、本稿でも近澤氏の形態分類を基に検討を行った（第13・14表）。



第69図 移動式竈出土遺跡位置図（番号は第13・14表No.に対応）

- ①掛口 近澤氏の分類に倣い、掛け口が内傾するものをI類、そのうち「ゆるやかに内彎し、端部を細くおさめるもの」をa、「直線的に立上り、端部を肥厚または内側に屈曲させるもの」をbとした。また今回、I類のなかでa・bに属さず掛け口の長さが短いもしくは殆どない形態を「C」と新たに分類した。日本海側に分布するII類の「くの字状に外反し、甕状口縁を呈するもの」は確認されなかった。
- ②底 底の成形方法によって「付け底」・「曲げ底」に分類した。集成した資料のうち底の残存するものすべてが「付け底」の形態であった。先学の研究で「曲げ底」の甕は畿内（生駒西麓中心）とその縁辺部に分布しているとされ（福田1978、近澤1992）、今回の調査からも少なくとも香川県は分布圏内ではないことがほぼ確実である。
- また「付け底」の個体は底上面と掛け口との高低により、a（底高<掛け口高）とb（底高>掛け口高）の2つに分類した。
- ③炊口 炊口の立面形態により分類した。近澤氏はI類（立面形が半円に近いもの）とII類（立面形が台形に近いもの）に分け、「付け底」の個体はI類からII類に変遷するとした（近澤1992）。今回集成した香川県下の資料には半円形のものは存在しなかった。破片での出土が多く炊口全体の形状を把握することが困難であったが、隅丸で上端が平坦なもの（平）が大部分で、一部隅丸で上端が囁んだ個体（凹）四国学院大学構内遺跡出土遺物（第71図No13-90）でみられた。上端が囁んだ個体（凹）は、他の資料が破片であり炊口全体が残存していることが少ないとみられ、他にも存在する可能性がある。また四国学院大学構内遺跡資料（第71図No13-90）は、炊口の横幅や掛け口径に比べ器高が低いのが特徴である。
- ④把手 角状把手先端の上がり下がりによって、a（水平）、b（先端上がり）、c（先端下がり）の3種に分類される。ただし破片での出土が多く、個体ごとに把手の有無を確認することは不可能である。また把手部分のみで出土した際には、鍋や瓶など他の煮炊具の把手と判別がつかない場合も多い。以上の理由から体系的に把握することは困難であったが、把手を伴う状態で出土した甕について観察すると、形状は全て角状を呈しc（先端下がり）であった。
- ⑤凸帯 把手と同じく破片での出土が多く、個体ごとに有無を確認することが困難である。出土した個体を観察すると、凸帯を巡らす位置に何パターンかありそうであるが、残存状況が悪いため確定は出来ない。
- ⑥煙孔 「炊口の背面に穿たれた円形の透かし孔」であるが、今回の資料からは確認されなかった。破片での出土が多く、本来無いもののか見落としているだけなのかは現段階では判定出来ない。
- ⑦基部 基部が裾あきか裾あきでないかの2種に分かれる（近澤1992）が、基部が残存する個体のうち、No.7小山・南谷遺跡Iの(40)が底部分のみ少し出っ張っており裾あきの可能性があるが、破片のため確証はない。それ以外の個体はすべて裾あきではない。

消長と型式的変遷

香川県内の遺跡で移動式甕が出現するのは6世紀後半からである。畿内の出土例と比較するとやや後出する。7世紀～8世紀にかけてが最も出土量が多い。9世紀以降は、出土数は前段階に比べ減少するものの中世まで一定量出土しており、その後近世以降は造り付け甕を模した瓦質製品に換わる。

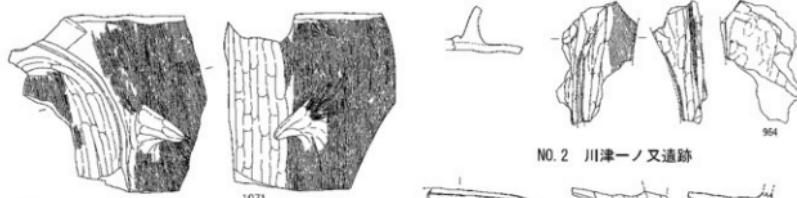
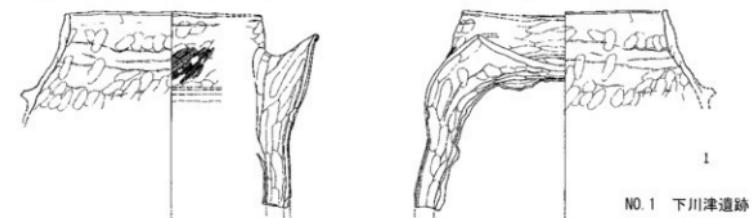
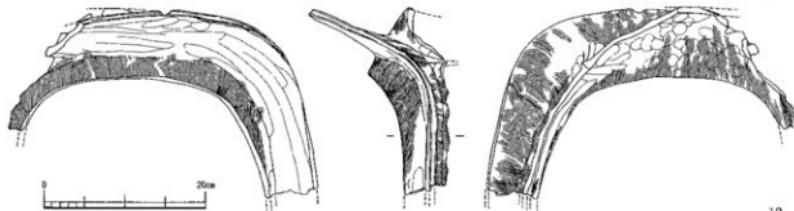
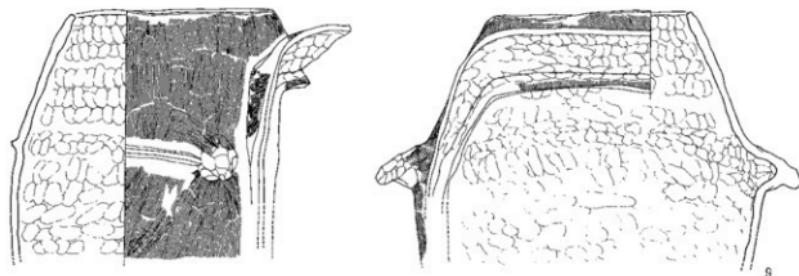
第13表 移動式竈出土一覧①

※()は破片のため推定

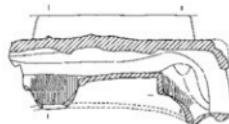
No.	遺跡名	種別	遺構名	遺構の年代	遺物No.	残存部位	掛口	底	炊口	備考	文献
1 下川津遺跡	集落	SDIII86 北部上層	6C後	156-1	掛口・体部	I b	付底a	—	凸帯・把手(c)有		
				156-2	底	—	付底	—			
				156-3	—	付底	—	—	凸帯有		
				156-4	底	—	付底	—	凸帯有		
				156-5	体部	—	—	—	凸帯有		
				156-6	体部	—	—	—	凸帯有		
				156-7	掛口	I b	—	—	凸帯有		
		SHIII05 床直	6C末～7C前	418-5	底	—	付底	—			
				425-3	底	—	付底	—			
		SHIII43-44	6C末～7C前	427-5	体部	—	—	—	凸帯有		
				427-6	基部	—	—	—			
		SHIII50上位	6C末～7C前	428-10	掛口?	I b	—	—			
				428-11	掛口?	I b	—	—			
		SPIII21	—	447-1	—	—	—	—			
		SKIII45	7C	460-8	底	—	—	—			
		SDIII19	—	474-18	底	—	—	—			
		SDIII25	7C後	475-9	基部除き ほぼ球形	I (a)	付底a	圓丸・平 把手(c)有			
		SDIII54	8C	479-5	底	I a	付底	圓丸			
		SDIII39上位	6C末～7C前	495-12	底(上部)	I a	付底a	圓丸・平			
		SDIII93 集石一括	6C末～7C前	496-1	掛口・体部	I (a)	—	—	凸帯有		
		SDIII177	6C末～7C前	504-1	掛口・底	I (a)	付底a (圓丸)	凸帯有			
2 川津一ノ又遺跡	集落	SDII1上層	7C～8C	443	底	—	付底	—			
				444	底(基部)	—	付底	—			
				500	底(上部)	I a	付底	—			
				635	基部	—	—	—	凸帯有		
		SDI5中層(上)	7C前	795	底(基部)	—	付底	—			
				962	掛口	I b	付底	—			
				963	底(基部)	—	付底	—		同一個体の 可能性有	
				964	底	—	付底	—			
		SD24上層 上位	7C	965	底(上部)	—	付底	(圓丸)			
				966	底(基部)	—	付底	—			
				1158	底(上部)	—	付底	(圓丸)・平			
				1464	底	—	付底	—			
3 川津一ノ又遺跡II	集落	SD41	7C前・ 7C後～8C初	1576	基部	—	—	—			
				1588	体部	—	—	—	凸帯有		
				845	底	—	付底	—			
		SD010 下～中層	7C前～中	931	基部	—	—	—			
				944	基部	—	—	把手(c)有			
				1071	炊口・体部	—	付底a	把手(c)有			
				1072	底(上部)	—	付底a	—			
				1073	底(上部)	—	付底	(圓丸)			
				1074	底(基部)	I a	付底a	圓丸			
4 稲木遺跡	集落	SD010 下～中層	7C前～中	1075	底	—	付底	圓丸・(平)		古野1998 西岡1989	
				1098	体部	I	—	—	凸帯有		
		SD002 下層 (第3層 (包含層))	7C～8C	1099	体部	I b	—	—	凸帯有		
				12	底(基部)	—	付底	—			
				111	底(上部)	I b	付底(a) (圓丸)・(平)	—			
5 川津川西遺跡	集落	SB03 SD007 SD002下層	7C末 8C 351	112	基部	—	—	—			
				293	底(上部)	—	付底	—			
				294	基部	—	—	—			
		SX19 SX20	9C前後	295	掛口	I c	付底b	—		森本昭1999	
				296	基部	—	—	—			
				297	基部	—	—	—			
				412	掛口	I b	—	—			

第14表 移動式竈出土一覧(2)

No.	遺跡名	種別	遺構名	遺構の年代	遺物No.	残存部位	掛口	底	炊口	備考	文献
5	川津川西遺跡	集落	SD135上層	7C~9C	499	体部	—	付底	—	NSDA同一個体の可能性有 遺本塙1999	
					500	底(上部)	I a	付底b	—		
					501	底(上部)	—	付底	—		
					502	底(上部)	I e	付底	—		
					503	底(上部)	I c	付底b	—		
					504	基部	—	付底	—		
6	原開遺跡I	集落	SPV428	7C中~10C前	1599	—	—	—	—	片桐2002	
					2604	基部	—	—	—		
7	小山・南谷遺跡I	集落	SXIV04	7C中	3637	基部	—	—	—	片桐1997	
					33	底(上部)	—	付底	(隅丸)		
			SE701	8C前	40	底(基部)	—	付底	—		
					45	—	—	—	—		
			SD702	9C後	182	底(上部)	I a	付底b	(隅丸)		
					183	底(基部)	—	付底	—		
			包含層	7C~9C	480	底(上部)	I e	付底b	(隅丸)・平		
					SP25	—	19	I b	付底	平	
8	坪井遺跡	集落	SE01	8C	36	—	—	付底	—	小野2002	
			SD01	8C中	89	掛口	I b	—	—		
			SD18	8C中	90	底	—	付底	—		
			SD42	8C中~後	114	底(上部)	—	付底	(隅丸)		
			SD73	8C	196	掛口	I	—	—		
			SD84	8C	331	底	—	付底	—		
			SR01	8C	393	底	—	付底	—		
			SR05	8C	538	底(基部)	—	付底	—		
			SR06	8C	701	底	—	付底	—		
					739	底	—	付底	—		
					834	底(上部)	—	付底	—		
					835	底	—	付底	—		
			I区包含層	8C	836	掛口?	I	—	—		
					837	基部	—	—	—		
					838	—	—	—	—		
					839	底	—	付底	—		
			II区包含層	8C	996	底	—	付底	—		
					997	基部	—	—	—		
9	正義寺遺跡・南王寺遺跡	集落	SD12	8C	196	底(上部)	I b	付底	—	廣瀬1994	
			SD13	8C	224	底(上部)	—	付底	(隅丸)・平		
			SP549	—	476	底(上部)	—	付底	—		
10	長砂古遺跡	集落	SK08	9C前	208	掛口	I a	—	—	磯崎也1988	
					209	底(上部)	I c	付底b	—		
					210	掛口	I o	付底	平		
					211	底(上部)	I c	付底a	(隅丸)・平		
					212	底(上部)	I c	付底a	(隅丸)・平		
11	川津東山田遺跡I区	集落	SD01(B)	9C後~10C前	266	底(上部)	—	付底	(隅丸)	山元2001	
					267	底(上部)	—	付底	—		
			SD01(C)	9C後~10C前	268	基部	—	—	—		
					313	—	—	—	—		
			SD3109	9C後~10C前	314	底(基部)	—	付底	—		
					315	底(上部)	I c	付底	(隅丸)		
			SD3210b	9C後	316	底(上部)	I o	付底b	(隅丸)		
					317	底(上部)	—	付底	—		
			SD3209	9C後	387	底(基部)	—	付底	—		
					388	基部	—	付底	—		
			SR01(B)	10C前	389	掛口	I b	—	—		
					441	底(基部)	—	付底	—		
			SR01(D)	10C後~12C	442	掛口	I b	—	—		
					443	底(上部)	I	付底b	—		
12	大浦浜遺跡	祭祀	O-6区SX26	—	528	底(上部)	I c	付底b	(隅丸)・平	大山1988	
					701	底(上部)	I c	付底	—		
13	四国学院大学構内遺跡	集落	溝01	7C中~8C初	794	底(上部)	I c	付底b	—	海邊也2003	
					832	底(上部)	I b	付底b	(隅丸)		
			溝16	7C末~8C初	—	底	—	—	—		



第70図 県内移動式竈実測図① (1:6)



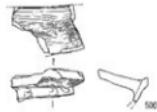
NO. 4 稲木遺跡
111



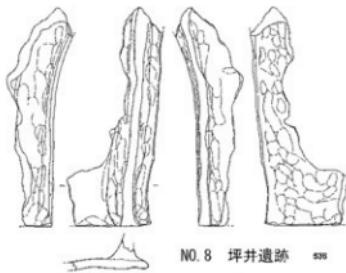
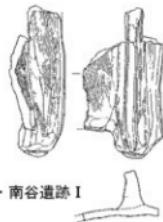
NO. 5 原間遺跡
301



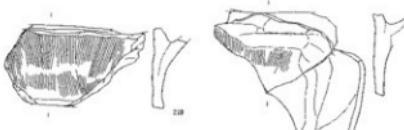
NO. 6 川津川西遺跡
501



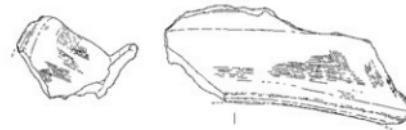
NO. 7 小山・南谷遺跡 I
401



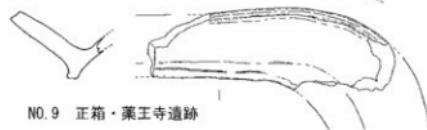
NO. 8 坪井遺跡
530



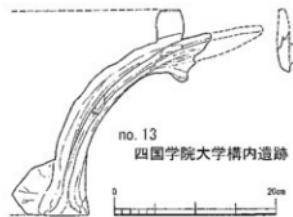
NO. 10 長砂古遺跡
201



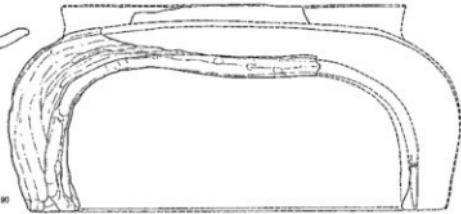
NO. 9 正箱・薬王寺遺跡
101



NO. 11 川津東山田遺跡 I 区
701



no. 13
四国学院大学構内遺跡
0 20cm



第71図 県内移動式竪穴測図② (1:6)

型式的変遷は、畿内の資料では付け底の竈の場合、掛口が a → b へ、底が a → b へ、炊口が I → II へ、把手が a → b → c と遷移するとされている（近澤1992）。しかし香川県下の資料は畿内における竈初現期の形態的属性を有していない個体が殆どである。炊口は I 類の半円形は見当たらず、把手の a（先下がり）・ b（先上がり）は確認できない。掛口・底の形態は時期による違いといふよりは、個体によってまちまちである。香川での竈の初現が畿内より後出すること、使用的に厳密な形態状の制約がなく急激な型式的変遷を受けなかったことがその原因であろう。ただし約一世紀単位でみると、「付け底のものは底の形が肩を張った形態となり、把手・凸帯は時期が下るにつれ消滅する（近澤1992）」傾向にある。

また「畿内では9世紀以降になると形態的・法量的に退化し形骸化したものだけが残るが、他の地域においては著しい変化を見せない（近澤1992）」とあるが、今回の県下収集資料でも時期が下るにつれ掛口の長さが退化し（C形態が増える）底の幅が縮小するものの、さほど大きな変化をせず中世まで一定量出土し続けることが解かった。

遺跡種別ごとの出土状況 一集落・墳墓・畿内と関係のある遺跡一

畿内における移動式竈の出土状況は、①古墳副葬品、②祭祀関係遺跡（遺構）、③堅穴式住居及びその近辺と3分される（近澤1992）。香川県内での出土状況をみてみると、集落遺跡の堅穴式住居や溝・土坑から出土しており、①古墳副葬品や②祭祀関係遺跡（遺構）での出土はみられない。畿内では①古墳副葬品として、土師器釜・甑・竈の煮炊具セットが埋葬される事例がある。しかし香川では土師器甕が埋葬されることはあるが、竈や甕を含めた煮炊具のセットが古墳副葬品として出土した事例は確認出来なかった。また香川県下でも溝や土坑から「土馬」・「斎串」が検出され②祭祀関係遺跡（遺構）の存在が考えられるが、このような遺構から竈が供伴している明確な事例は発見出来なかった。

香川県下の竈出土状況で一般的な事例は、集落遺跡の堅穴式住居や溝・土坑からの出土であるが、これをどう捉えるかは更なる検討が必要である。稻田氏・近澤氏は③堅穴式住居内の出土に関して、造り付け竈と移動式竈は併用されており、日常の炊飯は造り付け竈で行い移動式竈は非常日の祭的な目的を持ったものと指摘している（稻田1978・近澤1992）。県下の出土状況の位置付けを行うにはまだ良好な資料が不足している。現時点でいえることは、殆どの個体が土師器甕・鍋・甑といった煮炊具と一緒に出土している点である。

ミニチュア製品の有無について

畿内では旧河道や大溝から大量の土馬や人面墨書き土器と一緒に移動式竈をはじめとする煮炊具のミニチュア製品が出土しており、大祓いなどの祭祀行為と考えられている。香川県下で、移動式竈のミニチュア製品は出土事例がない。しかし坂出市北方沖合約10kmに位置する横石島に所在する大浦浜遺跡からはミニチュア甑形土器が出土している。県内唯一の出土例である。大浦浜遺跡は、この他にもミニチュア土器・舟形土製品・滑石製有孔円板などの製塙・漁労活動に伴う祭祀遺物や、奈良三彩・帶金具・皇朝十二錢など「国家的祭祀」を窺わせる特異な遺物が出土している（大山1988）。

また横石島の西方約3kmに位置する岡山県笠岡市大飛島の大飛島遺跡からも同様に、三彩壺・ガラス片・鏡・帶金具・石帶・皇朝十二錢が出土しており、この遺跡からは移動式竈のミニチュ

ア製品が出土している（倉敷考古館1964）。煮炊具形のミニチュア製品が、中央との強い関りが想定される祭祀遺跡に限り出土しており、他の県内遺跡（祭祀遺跡を含む）から全く出土していないことは非常に興味深い。

おわりに

以上、香川県内の移動式竈を集成し、その状況を探った。形態上の特徴については、掛け口が内傾し付け底のもの（近澤氏分類のA型式）で占められる。畿内より遅れ6世紀後半代に出現し、掛け口・底において若干の退化がみられるものの、あまり型式変化せず中世まで残存する。出土状況は一般的に集落の堅穴住居・溝・土坑から他の土師質煮炊具と共に出土する。

遺物の性質上破片での出土が多いため今回は詳細な全体像を掴むまでは至らなかったが、今後良好な資料の増加を待って検討する事としたい。

第3節 四国学院大学隣接地（善通寺市民会館建設地）採集遺物について

はじめに

ここに紹介する遺物は四国学院大学敷地の北東側に隣接する、善通寺市民会館建設時に表面採集されたものである。これまで確認された地点外からの出土遺物であるため、四国学院大学構内遺跡との直接の関連性はないが、資料紹介を行う。

これらの遺物は、四国学院大学考古学研究部より先年寄贈を受けた市内遺跡採集遺物の一部である。同梱されていたラベルには、「1978（昭和53）年2月6日 上吉田町 善通寺市民会館工事現場表探」と記載されている。正しい住所は善通寺市文京町3丁目3番1号であるので、上吉田町というのは誤記であろう。市の記録によると市民会館の設立は、1978（昭和53）年10月15日があるので、ラベルの記載時期と一致する。このことから当時の考古学研究部員が、掘削されていった建設地内に散布していた遺物を採集したと推測される。

市民会館建設地は、四国学院と同じく戦前までは、旧陸軍第十一師団騎兵隊が所在していた場所に該当する。その後、市民会館が建設される前には、第十一師団が使用していた建物を転用した木造の市営住宅が建っていた。

採集遺物について

種類・時期

採集された遺物は須恵器・土師器・瓦器など10数点にのぼる。このうち図化できたのは、以下の4点のみである。

(1)は、須恵器甕である。口縁部のみ残存する。口縁端部は肥厚し下垂する。内外面ともにナデ調整である。口縁外面は強いナデ調整のため面を持つ。外面には左斜め方向の11条からなる波状紋が施されている。復元口径33.2cm、残存高3.6cm、色調は外面とも暗灰色、断面灰色を呈する。焼成は良好。6世紀のものと考えられる。

(2)は、瓦器甕である。底部及び体部の下半の一部のみ残存する。退化した断面三角形の貼り付け高台が付く。炭素は内外面ともに吸着しているが、外面は剥離が著しい。暗文は確認できなかつ

た。復元底径10.0cm、残存高0.9cm、色調は外面灰白色、内面暗灰色、断面灰白色を呈する。焼成は不良。高台の形状から13世紀のものと考えられる。

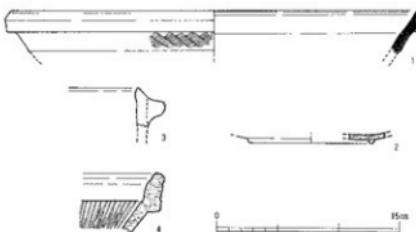
(3)は、土師器土釜である。口縁および受け部の一部が残存する。端部・受け部は、共に丸く收める。端部は若干内傾する。受け部は体部整形の後に貼り付けられている。内外面ともにナデ調整。体部は欠損しているが、類例より長胴であったと推測できる。残存高3.2cm、色調は外面橙色、内面橙褐色、断面橙褐色を呈する。焼成は良好。片桐編年(片桐1992)のII-①期、すなわち11世紀第2四半期のものと考えられる。

(4)は、堺・明石系の片口擂鉢である。口縁部は玉縁状に肥厚する。端部は面取りがなされており、断面は長方形をなす。端部外面には2条の弱い凹線が施される。体部との境界部分には、段差をつくる。体部は直線的にのびる。内面はスリメのちナデ消し、外表面はケズリを施す。スリメは二重になされており、この時期のものとしては丁寧に製作されている。残存高5.0cm、色調は外面暗茶褐色、内面茶褐色、断面赤褐色を呈する。焼成は良好堅緻。18世紀末～19世紀初頭のものと考えられる。

おわりに

紹介した資料は、多様な種類で構成される。時期的にも四国学院大学構内遺跡に先行する6世紀から近世まで幅広い。四国学院大学構内遺跡の主な時期が7世紀であることから、市民会館建設地は時期的に符合しない。また遺構が分布するのは、四国学院敷地内でも中央部から南西部側であることから、隣接する別の遺跡であった可能性が高い。

建設された1978年当時は、県下でも文化財担当職員も数人しかいない状況下で、当然、埋蔵文化財に対する認識も希薄な時期であったため、この地点の確認調査は実施されていない。今後、遺構の有無も含めて注意する必要がある。



第72図 市民会館建設地探集遺物 (1:4)

第4節 埋蔵文化財と新聞報道雑感 一四国学院大学構内遺跡は空海のご先祖のムラ?一

はじめに

平成14年6月6日。本日は四国学院大学構内遺跡の現地説明会がある日のため、いつもより2時間早く起床した。毎日の日課通り、寝ぼけ眼で新聞を眺めていた。昨日の記者発表では、今朝の朝刊に調査成果と現地説明会の案内を掲載してくれるとのことだった。記者発表が遅すぎたことに加えて、しかも今朝は昨晩から降り続く雨。少々大きめに新聞に掲載してくれなかつたら、誰も現地説明会を来ないのでないかという危惧を抱きながら地方版に目を通す。1行も掲載されていない。新聞記事にもなっていないのなら、説明会参加者が全く見込めない。しかし、前日夕方のテレビニュースでは、無いながらも地域ニュースで取り上げて貰ったようで(私は残業で全く観ていなかった)、新聞記事になっていなくても少しへはれてくれるだろうか。余分に説明会資料を印刷してしまったのは失敗だったなあ。そのようなことをほんやり考えながら新聞をめぐつていったが、全く掲載されてない。記者会見で発表した上司が、手応えは良かったという割には、記事にはならなかったのか。このようなことを考えながら、新聞の第1面を眺めて、目が点になつた。大きなカラー写真付きで掲載され、見出しへは、「空海の祖・佐伯一族の集落」。あわててコンビニエンスストアに行き別の新聞を購入すると、社会面に「空海一族の集落跡?」。他紙も同様の見出しが出ている。こちらの意図とは全く異なる見出しが踊っており、予測される批判を想像し、暗い気分で出勤することとなつた。

記者発表の経緯と経過

予兆は確かにあった。記者発表の後、コメントを取る記者を通じて記者発表の内容を漏れ聞いた県の文化財関係者から、発表内容の確認を行う連絡があった。その会話のやり取りの中で、「なぜ空海とのかかわりばかり聞くのか?」「どのような内容ですか?」「どうも記者が勘違いしているらしい。」私はあまり気にも留めなかつたが、この時には、すでにこの遺跡と弘法大師空海が結びつき、一人歩きを始めていたようだつた。夜に残業をしていると、記者から職場へ1本の電話があった。「適当なコメントを頂けないのですが、空海とか佐伯氏などに詳しい大学の先生とかご存知ないでしょうか。」「発表時にご紹介した考古学の先生では駄目なのですか。そういう方面でしたら文献史学か密教学をご研究されている先生を探してみてください。」このような簡単なやりとりだけであったが、今思えばその際に記事の内容を確認しておけば良かったと後悔は尽きない。

話を記者発表当日に戻そう。筆者は現地説明会の準備に追われ、記者発表の場には同席していない。以下の内容は、新聞報道の4日後、記者発表でのやり取りを上司から聞き取りしたメモを元に復元している。よって一方的な意見のみで、事実誤認をしている可能性もあるが、その責は全て筆者が負うことを明記しておきたい。

記者発表は、平成14年6月5日、午前9時30分から四国学院大学内の会議室にて行われた。場所は調査地すぐ南側に建つ、法人事務部棟、通称「ホワイトハウス」の2階である。発表者側は、学校法人四国学院理事長・図書館長はじめ四国学院大学関係者3~4名および善通寺市教育委員会は教育次長・文化振興室長・文化振興室室長補佐(いずれも当時)であった。報道関係者は新聞社7社およびテレビ局2局であった。結果的に新聞6紙、テレビ2局で報道された。発表の進行は四国学院大学の職員で、実際の発表はすべて市教委室長補佐(調査団調査主任)が行った。

報道関係への発表資料は、後日の現地説明会で配布する予定のものを流用していた。これが問題となるので、冗長になるが配布資料のまとめ部分を引用する。

『今回の調査によって様々な遺構・遺物が見つかりました。主な遺構は竪穴住居・掘立柱建物・溝などです。遺物もたくさんみつかりました。これらを踏まえて遺跡の位置付けなどを考えてみます。(中略) 遺物のなかで特徴的なものに轄の羽口と軒丸瓦があります。轄とは金属の製錬・精錬の際に用いる送風のための設備です。そして送風口に当たる部分が羽口です。(中略) この付近に製鉄に関連する遺構(製鉄所や工房など)が存在していたことを意味しています。軒丸瓦は単弁十六葉蓮華文軒丸瓦で7世紀代のものです。この瓦と同じものが善通寺の前身である伝導寺(仲村庵寺)からも見つかっており、この遺跡との密接な関係が予想できます。

これらのことを併せて考えてみると、遺構から分かることは所謂一般の人々の集落ではなく、かなり階層的に上の人々(豪族)の集落と言えます。(中略) さらにもう一つのキーワードは、伝導寺と同じ形の軒丸瓦がみつかったということです。伝導寺を建立した氏族は旧讃岐国国造の流れをくむ佐伯氏とされています。佐伯氏は弘法大師空海を輩出した氏族としても有名です。豪族の集落・製鉄の可能性・伝導寺との関連。これらのキーワードを併せてみると、今回見つかった集落は佐伯氏の集落であった可能性があると言えるでしょう。空海が生まれたのは774年ですから直接結びつけるわけにはいきませんが、少なくとも空海より2世代くらい上の人々が住んでいたのではないでしょうか? 調査でわかった概要は以上です。後は皆さんのたくましい想像力を働かせて、当時の様子を思い描いてみてください。』

記者発表では、純粋な遺跡の性格などの説明のみで、記者からの質問は、発表内容に関する内容が中心で、調査面積や遺構の時期などの事実確認程度であったようである。しかし、記者発表終了後、電話にて補足質問が集中したのは、発表資料のまとめ部分に書かれた内容であった。

埋蔵文化財と新聞報道

今思えば、一般市民向けにわかりやすく説明文を作成したつもりであったが、文章中に使った単語が一人歩きし、個々の新聞の見出しに散りばめられている。この文章は筆者が作成し、上司に修正してもらったものである。筆者としては、当然研究者向けではなく一般の人に遺跡の性格をわかりやすく説明したつもりであった。事実関係の精査は、記者発表時にはほとんどなされておらず、現地説明会資料の「まとめ」部分以外は淡々と(?)事実報告が記載されている。「まとめ」に書いた内容は、調査費を負担して頂いた大学側と説明会に参加してくれた一般市民への文化財に対するロマンや夢を膨らませるためにリップサービス程度の意識であった。この筆者の甘い認識が、新聞報道を読んだ研究者から批判を浴びる結果となった。

從来の学説をくつがえすような発見が、そういうこともあるものではない。そこではじめて見つかったものだとか、今までに見つかっているものよりも古いとか、大きいとか、報道側はいわゆる歌い文句が欲しいのである(小林1984)。報道側が希少性・異常性を強調させたり、歴史上の人物を結びつけたがる風潮は、報道側に対する研究者の不信感を増幅させていることは厳然たる事実であろう(新納1986)。しかし、この姿勢は報道側特有の姿勢であって報道機関の組織体質、記者個人の考え方によるため、致し方ない面もある。報道機関は、公正公平な報道という社会的使命が存在すると同時に営利を追求する必要がある。すなわち、他社との競争に勝たなければならぬのである。特に記者発表の場合、事実関係の情報は各社ともに同じであるから、見出

しを工夫することによって他紙との違いを出すことに腐心する。特に新聞は、考古学・文化財の専門家よりも読者に近い立場を取っており、圧倒的多数の考古学や文化財にあまり関心や知識のない読者をどう惹きつけるかに腐心する（片岡2000）。手堅いが読まれない記事よりも多少きわどくても読んでもらえる記事を優先する姿勢については、それぞれが置かれている立場の違いに起因するもので、一方的に否定することは出来ない。

今回の最大の反省点は、筆者の報道側に対する認識の甘さである。筆者が報道側への対応に不慣れであったため、彼らが何に興味を示し、どのような内容に重点を置いて記事を執筆・掲載したがっているのか、全く把握できていなかった。この部分をきちんと認識していれば、想像力とロマンをかきたてる（？）、一般市民向けの文章を流用することはなかったであろう。十分検討した内容の範囲内での遺跡の性格を記した文章を作成すればこのような混乱は避けられたのだろう。

その一方で、大きく取り上げられたために見学者が多数詰め掛けてくれたのは、報道のおかげといえる。現地説明会当日の新聞報道、雨天という悪条件が重なったにもかかわらず、最終的に200人以上の見学者があった。市内からの参加者が中心であるが、県内他市町をはじめ、遠く徳島市、高知市、今治市などからの参加者もあった。説明会終了後、杖をついた高齢の男性が近づいて来られて、「私は戦争中、ここ（陸軍第十一師団）の駆逐兵隊に属しました。当時はこんな立派なものが埋まっているとは思っていませんでした。高齢の上、小豆島に住んでいるので善通寺市に来ることはもう無いと思っていましたが、新聞を読んで、どうしても見に行きたくて娘に頼んで連れて来てもらいました。今から久しぶりにお寺（善通寺）にお参りしてきます。良いものを見せて頂きました。」と笑顔で話しかけて下さったのが印象的であった。また後日、調査費を負担した大学関係者から、「あれだけ報道してもらい、説明会当日も予想をはるかに超える沢山の方が大学に来てもらえたので、知名度アップに非常に貢献してもらいました。」と、喜んで頂いた。調査費の原因者負担とマスコミ報道は別個のこととはいえ、やはり負担を強いている大学側が喜ばれているのは、調査担当者としても喜ばしいことであった。今回の一連の対応を自分自身で全否定して落ち込んでいた筆者にとっては、本当に助けられた声であった。

筆者は、発表を行う行政側が報道機関を強く意識する必要はないと考える。むしろ、報道側に迎合することなく、事実関係を検討した上で発表に望むことが肝要である。また同時に、報道側の考え方を念頭においての対応も必要となってくる。今回の記者発表（いわゆるしばり）のような形式で行う場合には、報道側は内容よりも見出しに人目につく文言を並べたがる傾向にあるので、特に注意するべきである。自省を込めて記しておきたい。

おわりに

本遺跡の一連の報道を通じて、様々なご意見・ご批判を頂戴し、様々なこと考えさせられた。発掘調査を行う行政側と報道側、費用負担者、一般市民、研究者、それぞれの立場が異なれば、当然、文化財・考古学に対する考え方も異なってくる。よって新聞をはじめとする各メディアへ期待するニュアンスも自ずと異なってくる。せっかく調査したのだから報道してもらおう、現地説明会を実施したいから周知・広報に報道機関を利用しようといった低い認識では、報道側とのより良い関係は芽生えない。調査担当者は、記者発表で何を伝えたいのか、どういう意図で行うのか、そのためどのような資料が必要なのか、きちんと把握・認識した上で報道側と対峙することが重要といえるだろう。

空海一族の集落跡?



佐伯氏の集落跡とされるこの場所は、現在は田畠として利用されている。左側には「佐伯氏の集落跡」と書かれた看板がある。

佐伯氏の集落跡とされるこの場所は、現在は田畠として利用されている。左側には「佐伯氏の集落跡」と書かれた看板がある。

普通守で山梗見つかる

佐伯氏
伝導寺と同型瓦出土
ゆかりり

普通守で山梗見つかる
伝導寺と同型瓦出土
ゆかりり

普通守で山梗見つかる
伝導寺と同型瓦出土
ゆかりり



普通守で山梗見つかる
伝導寺と同型瓦出土
ゆかりり

空海の祖・佐伯一族の集落 四国学院大で発掘

空海の祖・佐伯一族の集落
四国学院大で発掘

空海の祖・佐伯一族の集落
四国学院大で発掘

空海の祖・佐伯一族の集落
四国学院大で発掘

空海の祖・佐伯一族の集落
四国学院大で発掘

空海の祖・佐伯一族の集落
四国学院大で発掘

空海の祖・佐伯一族の集落
四国学院大で発掘

空海の祖・佐伯一族の集落
四国学院大で発掘

空海の祖・佐伯一族の集落
四国学院大で発掘



空海の祖先といわれる地方豪族、佐伯一族の施設だった可能性が高いと指摘

竪穴住居跡など出土 佐伯一族の遺跡か 書道寺

竪穴住居跡など出土
佐伯一族の遺跡か
書道寺

竪穴住居跡など出土
佐伯一族の遺跡か
書道寺

竪穴住居跡など出土
佐伯一族の遺跡か
書道寺

竪穴住居跡など出土
佐伯一族の遺跡か
書道寺

竪穴住居跡など出土
佐伯一族の遺跡か
書道寺

大規模な集落跡発掘 86世紀前半 佐伯氏統治の村か

大規模な集落跡発掘
86世紀前半 佐伯氏統治の村か

大規模な集落跡発掘
86世紀前半 佐伯氏統治の村か

大規模な集落跡発掘
86世紀前半 佐伯氏統治の村か

大規模な集落跡発掘
86世紀前半 佐伯氏統治の村か

大規模な集落跡発掘
86世紀前半 佐伯氏統治の村か

【主要参考・引用文献】

【調査報告書】

- 磯崎 寛・松浦 隆・片桐孝浩ほか1988『石田遺跡・長砂古遺跡・杵田八丁遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊 香川県教育委員会・日本道路公団
- 大山真充1988『大浦浜遺跡』瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告V 香川県教育委員会・本州四国連絡橋公团
- 小野秀幸2002『坪井遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第40冊 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団・香川県土木部
- 海邊博史2002『善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』7 旧練兵場遺跡・四国学院大学構内遺跡・菊塚古墳 善通寺市教育委員会
- 海邊博史・渡邊淳子ほか2003『善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』8 菊塚古墳・三井遺跡 善通寺市教育委員会
- 香川県教育委員会2002『三谷中原遺跡』『県道關係埋蔵文化財発掘調査概報 平成14年度』
- 香川県教育委員会2003『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』
- 片桐孝浩1992『川津元結木遺跡』中小河川大東川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 香川県教育委員会
- 片桐孝浩1997a『川津一ノ又遺跡』中小河川大東川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 片桐孝浩1997b『小山・南谷遺跡I』県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 片桐孝浩2002『原間遺跡I』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第39冊 香川県教育委員会・財團法人香川県埋蔵文化財調査センター
- 國木健司1993『生野本町遺跡発掘調査報告書』 香川県教育委員会
- 國島浩正ほか1993『史跡天霧城跡保存管理計画書』平成4年度国庫補助事業報告書 多度津町教育委員会
- 倉敷考古館1964『大飛島遺跡』
- 藏本晋司ほか1999『川津川西遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第33冊 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
- 齊藤賢一・藤好史郎1982『天霧城発掘調査概報』香川県善通寺市・多度津町・三野町所在の中世山城の調査 香川県教育委員会・天霧城跡発掘調査班
- 笹川龍一1983『五条遺跡発掘調査報告書』 善通寺市教育委員会
- 笹川龍一1985『彼ノ宗遺跡』弘川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 善通寺市教育委員会
- 笹川龍一1986『仙遊遺跡発掘調査報告書』旧練兵場遺跡仙遊I地区 善通寺市教育委員会
- 笹川龍一1988『九頭神遺跡発掘調査報告書』 九頭神遺跡発掘調査団・善通寺市教育委員会
- 笹川龍一1989a『稻木遺跡』県道西白方善通寺線樋藪踏切除却工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 稲木遺跡発掘調査団
- 笹川龍一1989b『仲村廃寺』 善通寺市教育委員会

笹川龍一1991『月信遺跡』県営畠地帯総合整備事業普通寺西部地区碑殿農道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 月信遺跡発掘調査団

笹川龍一1992『史跡有岡古墳群（王墓山古墳）保存整備事業報告書』普通寺市教育委員会

笹川龍一1993a『御館神社古墳発掘調査報告』普通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1 普通寺市教育委員会

笹川龍一1993b『史跡有岡古墳群（宮が尾古墳）調査報告』史跡有岡古墳群（宮が尾古墳）保存整備事業に伴う発掘調査報告書 普通寺市教育委員会

笹川龍一1993c『永井遺跡発掘調査報告書』都市計画道路大通線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 普通寺市埋蔵文化財発掘調査団

笹川龍一1994『青龍古墳発掘調査報告書』普通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2 普通寺市教育委員会

笹川龍一1995『九頭神遺跡・宮が尾古墳隣接地調査報告書』普通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3 普通寺市教育委員会

笹川龍一ほか1996『香色山山頂遺跡群発掘調査報告書』普通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4 普通寺市教育委員会 1996年

笹川龍一ほか1997『史跡有岡古墳群（宮が尾古墳）保存整備事業報告書』普通寺市教育委員会

笹川龍一1999『山南遺跡・彼ノ宗遺跡発掘調査報告書』普通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5 普通寺市教育委員会

笹川龍一2001『鉢伏山北東麓遺跡群・菊塚古墳発掘調査報告書』普通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6 普通寺市教育委員会

笹川龍一ほか2003『史跡有岡古墳群（野田院古墳）保存整備事業報告書』普通寺市教育委員会

佐藤竜馬2003『生野南口遺跡』香川県教育委員会

白川 武・秋山 忠ほか1980『讃岐天霧城を探る』一市二町天霧城跡保存会

新編香川叢書刊行企画委員会1983『新編香川叢書・考古篇』香川県教育委員会

角南聰一郎ほか2001『旧練兵場遺跡』市営西仙遊町住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 普通寺市・(財)元興寺文化財研究所

角南聰一郎ほか2002『旧練兵場遺跡』特別養護老人ホーム仙遊荘建替に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 普通寺市・(財)元興寺文化財研究所

西岡達哉編1989『船木遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 香川県教育委員会

西岡達哉編1995『龍川四条遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第15冊 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

西岡達哉編1997『旧練兵場遺跡』国立普通寺病院看護学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報第1冊 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

西岡達哉編1998『旧練兵場遺跡』国立普通寺病院看護学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報第2冊 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

信里芳紀2002『小谷窯跡・塚穴古墳』高松東ファクトリーパーク造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

廣瀬常雄1994a『金藏寺下所遺跡・西碑殿遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

報告第10冊 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
廣瀬常雄1994b『正箱遺跡・薬王寺遺跡』県道山崎御厨線道路改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
報告 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター
藤好史郎・西村尋文ほか1990『下川津遺跡』瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告ⅤI 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財センター
古野徳久1998『川津一ノ又遺跡Ⅱ』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第30冊
香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
松本和彦・宮崎哲治2000『雄山古墳群』県道高松大越坂出線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
松本豊胤・森本義臣・東原輝明1983『王墓山古墳調査概報』 善通寺市教育委員会
松本敏三1987『県道西白方善通寺線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』昭和61年度 善通寺市・香川県教育委員会
真鍋昌宏ほか1987『中村遺跡・乾遺跡・上一坊遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 香川県教育委員会
真鍋昌宏・渡部明夫1987『矢ノ塚遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告書第3冊 香川県教育委員会・
真鍋昌宏2003『山南遺跡』県営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
森 格也2003『北原2号墳・北原遺跡』県道観音寺善通寺線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
森下英治1996『旧練兵場遺跡』Ⅲ 平成7年度国立善通寺病院内発掘調査報告 香川県教育委員会
森下英治2003『国立善通寺病院改修事業に伴う旧練兵場遺跡発掘調査概報』1 財團法人香川県埋蔵文化財調査センター
安田和文・笠川龍一1984『仲村廐寺発掘調査報告』旧練兵場遺跡内 善通寺市教育委員会
山本英之1992『南海道推定地の調査』『讃岐国弘福寺領の調査』 高松市教育委員会
山元素子2001『川津東山田遺跡!区』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第38冊 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団・香川県土木
渡部明夫・薦田耕作1987『矢ノ塚遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告書第三冊 香川県教育委員会
渡部明夫1990『永井遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告書第9冊
香川県教育委員会

【論文ほか】

- 安藤文良1967「讃岐古瓦図録」『文化財協会報』特別号8 香川県文化財保護協会
- 安藤文良編1974『古瓦百選』讃岐の古瓦 美巧社
- 安藤文良1987「歴史時代・古瓦」『香川県史』第13巻 資料編考古 香川県
- 稲田孝司1978「忌の窓と王權」『考古学研究』第25巻第1号 考古学研究会
- 井上和人2003「古代土器製作技法考再説—近畿地方の瓦器碗・土師器杯類と丸底甕—」『文化財論叢—奈良文化財研究所創立50周年記念論文集』Ⅲ
- 大山真充1988「讃岐平野の条里」『古代の讃岐』 美巧社
- 片岡正人2000「マスコミから見た埋文行政」『考古学ジャーナル』456号 ニュー・サイエンス社
- 片桐孝浩1995「香川県出土古代陶窯についての一考察」『香川考古』第4号 香川考古刊行会
- 川畠 聰1996「讃岐の古瓦展」高松市歴史資料館
- 金田章裕1987「条里と村落生活」『香川県史』1通史編原始・古代 香川県
- 金田章裕1992「微地形と中世村落」 吉川弘文館
- 金田章裕1993「古代日本の景観」 吉川弘文館
- 小林行雄1984「調査と報道」『考古学ジャーナル』236号 ニュー・サイエンス社
- 笛川龍一1986「彼ノ宗遺跡の発掘調査とその問題点」『香川史学』第15号 香川歴史学会
- 笛川龍一1989「古墳時代の堅穴住居で確認された廃絶時の祭祀について」『香川史学』第18号 香川歴史学会
- 新編香川叢書刊行企画委員会1983「新編香川叢書」考古篇 香川県教育委員会
- 佐藤竜馬1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設四拾周年記念考古学論叢』 関西大学文学部考古学研究室
- 佐藤竜馬1998「讃岐における官衙関連遺跡と集落動向」『律令国家における地方官衙遺構研究の現状と課題』 古代学協会四国支部第12回大会発表資料
- 佐藤竜馬1999a「中国・四国の須恵器窯」『須恵器窯構造資料集』 窯跡研究会
- 佐藤竜馬1999b「讃岐の須恵器窯」『須恵器窯の技術と系譜』 窯跡研究会
- 善通寺市1977「善通寺市史」第一巻
- 田辺昭三1981「須恵器大成」 角川書店
- 近澤豊明1992「竈形土製品について」『長岡京古文化論集Ⅱ』 中山修一先生喜寿記念事業会編
- 中世土器研究会編1995「概説中世の土器・陶磁器」 真陽社
- 辻 美紀1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集—』 真陽社
- 寺沢 薫1986「論考 織内古式土師器の編年と二・三ノ問題」『矢部遺跡』 奈良県橿原考古学研究所
- 新納 泉1986「ジャーナリズムと考古学」『岩波講座日本考古学』7 現代と考古学 岩波書店
- 西 弘海1979「西日本の土師器」『世界陶磁全集』2 日本古代 小学館
- 西口陽一1989「大阪・イイダコ壺」『考古学研究』141 考古学研究会
- 野中寛文1992「条里制研究の一観点」『四国中世史研究』第2号 四国中世史研究会
- 藤井直正1983「讃岐国古代寺院の研究」『藤澤一夫先生古希記念論集 古文化論叢』
- 松本敏三・岩橋 孝1984「香川県古代窯業遺跡分布調査報告1 (旧刈田郡・旧三野郡)」『瀬戸内

- 海歴史民俗資料館紀要』 I 濑戸内海歴史民俗資料館
松本敏三・岩橋 孝1985「香川県古代窯業遺跡分布調査報告Ⅱ（旧多度郡・旧那珂郡以東）」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』 II 濑戸内海歴史民俗資料館
真野 修 1990「播磨灘沿岸における弥生時代の飯蛸牽縄漁」『今里幾次先生古希記念 播磨考古学論叢』
宮武 進1995「古代交通」「鵜足郡・那珂郡の条里」『新編丸亀市史』 1 丸亀市
森下英治1997「丸亀平野条里型地割の考古学的検討」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』 V 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
森下英治2001「善通寺市旧練兵場遺跡における弥生土器の編年と地域性の検討（上）」『研究紀要』 IX 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
矢原高幸1973『善通寺市の古代文化』 善通寺市
山田邦和1998『須恵器生産の研究』 学生社

図 版





1. 全景(南から)



2. 北西側柱穴(ピット110・南から)



3. 北東側柱穴(ピット107・南から)



4. 南西側柱穴(ピット109・南から)



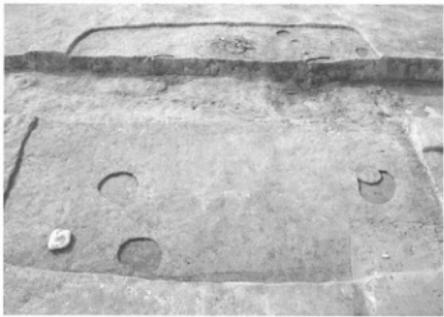
5. 南東側柱穴(ピット104・南から)



1. 全景
(南西から)



2. 検出状況①(南から)



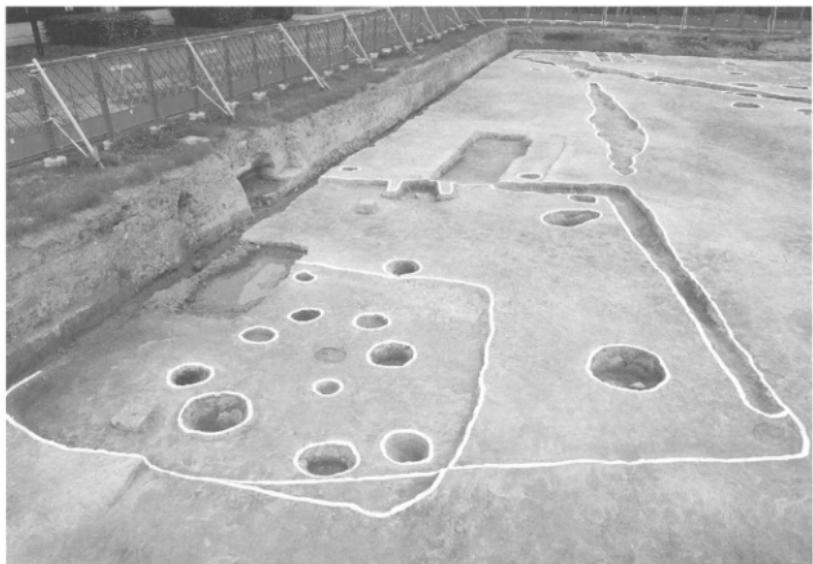
3. 検出状況②(南から)



4. 遺物出土状況(南から)



5. 北側壁溝断面(東から)



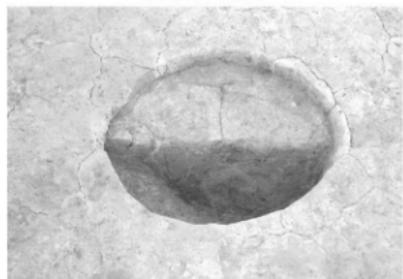
1. 全景(南から)



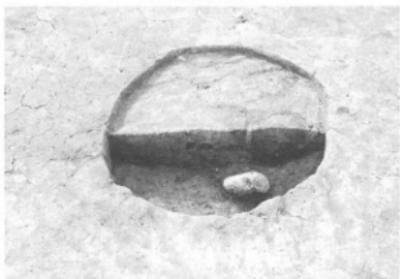
2. 北西側柱穴(東から)



3. 北東側柱穴(南から)



4. 南西側柱穴(ピット71・南から)



5. 南東側柱穴(南から)



1. 検出状況(南から)



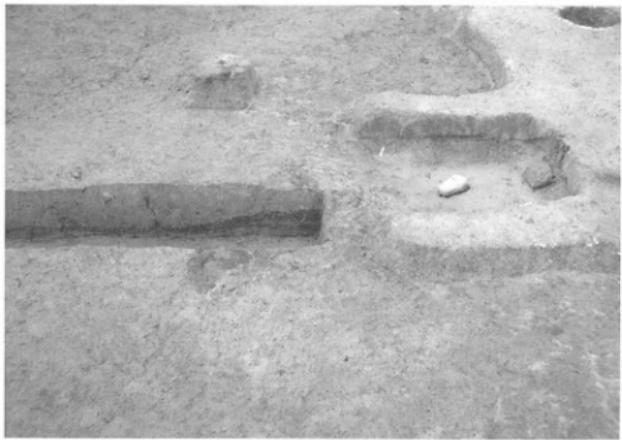
3. 窟内遺物出土状況(南から)



2. 全景(南から)



4. 窟完掘状況(南から)



5. 床面下層断面(東から)

図版5 穂穴住居 4



1. 全景(南から)



2. 北西側柱穴(南から)



3. 北東側柱穴(南から)



4. 南西側柱穴(ピット73・南から)



5. 南東側柱穴(南から)



1. 検出状況(南から)



2. 竈完掘状況①(南から)



3. 竈完掘状況②(西から)



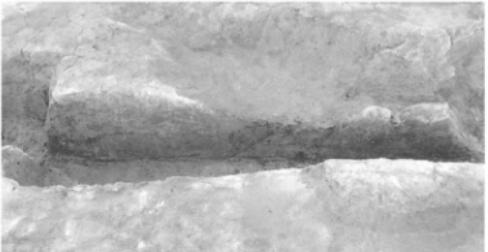
6. 竈東側焼土断面(西から)



4. 竈内焼土断面(西から)

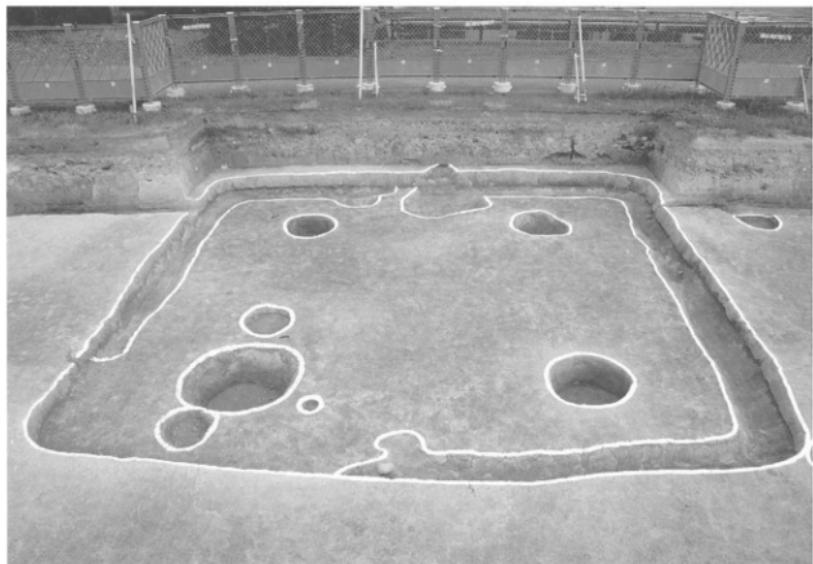


7. 溝1断面(東から)

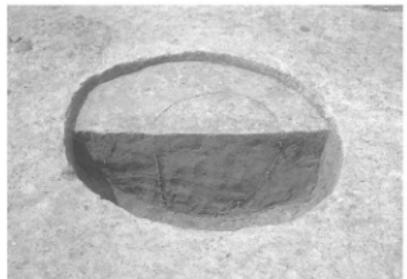


5. 竈下層断面(東から)

図版7 穂穴住居5



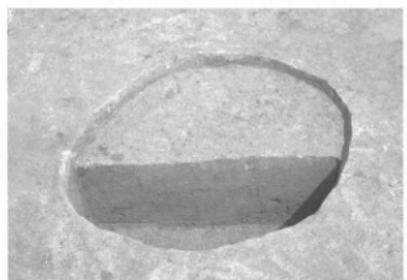
1. 全景(南から)



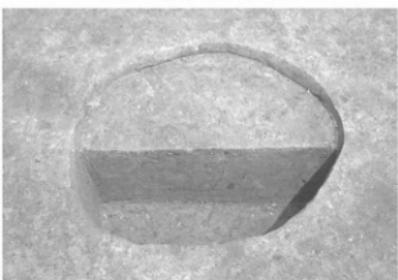
2. 北西側柱穴(南から)



3. 床面遺物出土状況(南から)



4. 南西側柱穴(南から)



5. 南東側柱穴(南から)



4. 壺内焼土検出状況(南から)



1. 検出状況(南から)



5. 壺完掘状況(南から)



2. 北西部壁溝断面(西から)



3. 北西畦南側壁溝断面(東から)



6. 焼土断面(西から)

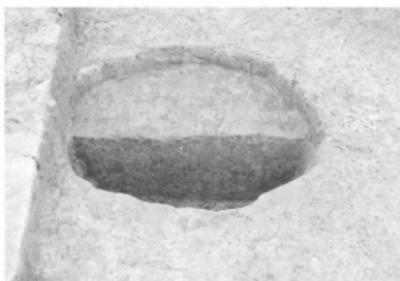
図版9 穂穴住居 6



1. 全景
(南から)



2. 北側柱穴(ピット93・東から)



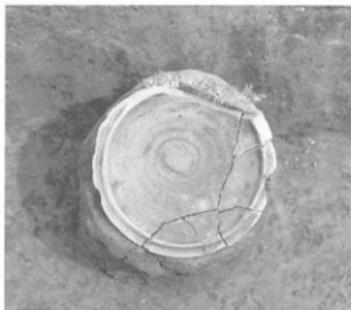
3. 南側柱穴(ピット72・南から)



4. 検出状況(南から)



1. 竪穴住居 8 全景
(北から)



2. 竪穴住居 8 畦断面(東から)

3. 竪穴住居 8 遺物出土状況(南から)



4. 竪穴住居 9 全景(北から)

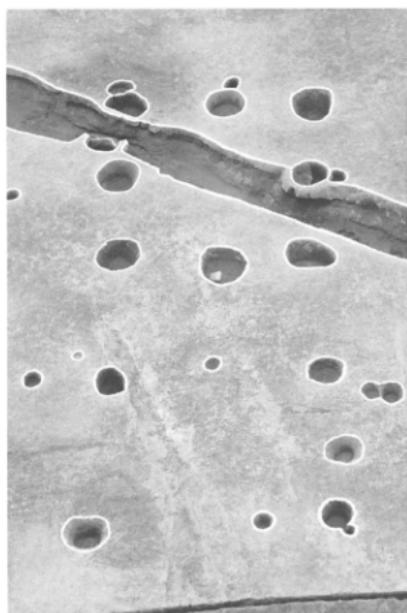


5. 竪穴住居 9 遺物出土状況(東から)

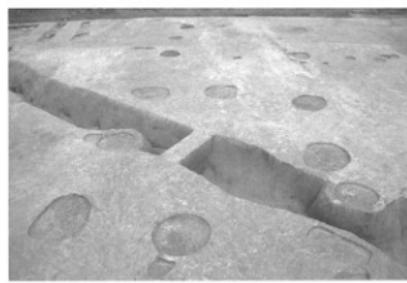


6. 竪穴住居 8・9 重複関係(北から)





1. 全景(北から)



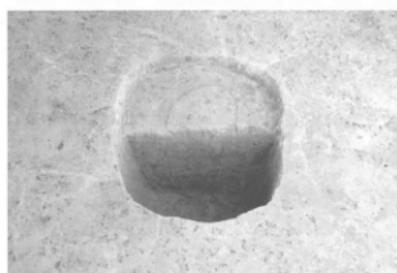
2. 検出状況(南から)



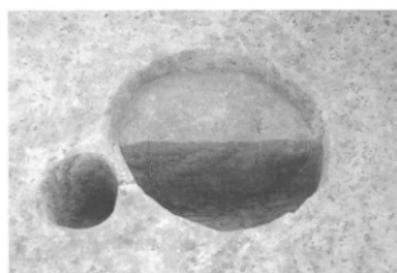
3. 掘立柱建物 1 南西側柱穴(ピット18・西から)



4. 掘立柱建物 1 南東側柱穴(ピット13・東から)



5. 掘立柱建物 1 北東側柱穴(ピット43・東から)



6. 掘立柱建物 1 北西側柱穴(ピット5・西から)



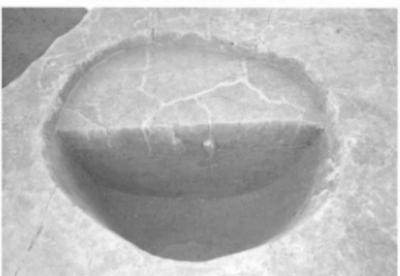
1. 南東側柱穴(ピット38・東から)



2. 南側柱穴(ピット35・南から)



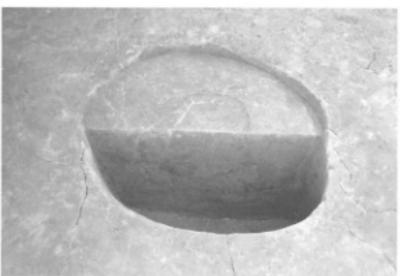
3. 南西側柱穴(ピット23・西から)



4. 東側柱穴(ピット12・東から)



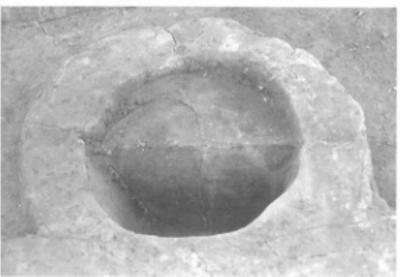
5. 西側柱穴(ピット25・西から)



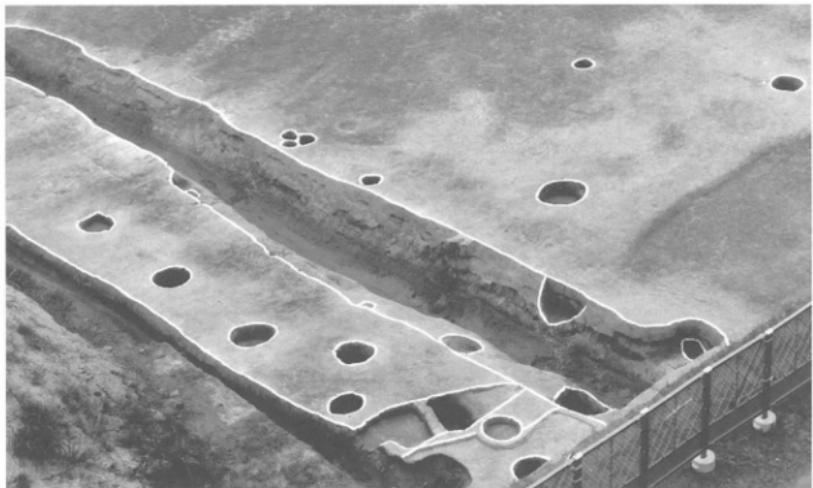
6. 北東側柱穴(ピット41・東から)



7. 北側柱穴(ピット19・北から)



8. 北西側柱穴(ピット20・西から)



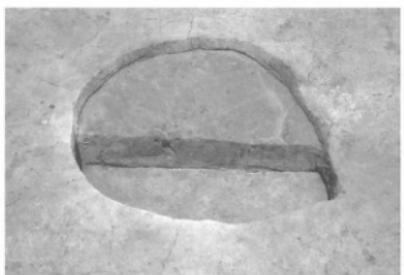
1. 全景①(北東から)



2. 全景②(北から)



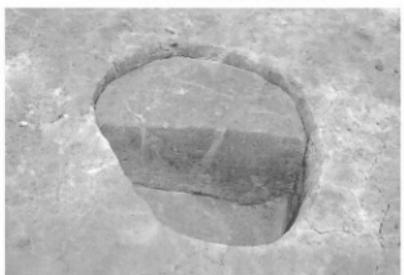
3. 全景③(南から)



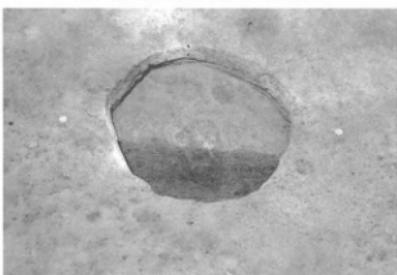
1. 柱穴7(ピット50・東から)



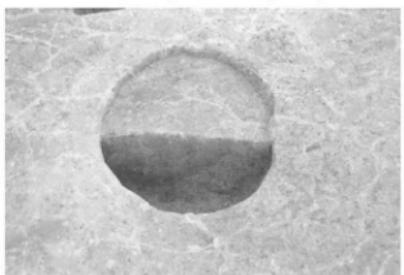
5. 柱穴9(ピット33・西から)



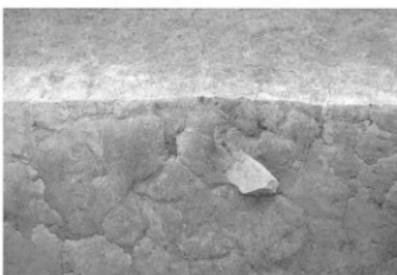
2. 柱穴5(ピット48・東から)



6. 柱穴10(ピット31・西から)



3. 柱穴4(ピット46・東から)



7. 柱穴12(ピット53・東から)



4. 柱穴2(ピット54・北から)



8. 柱穴1(ピット52・東から)



1. 全景(南から)



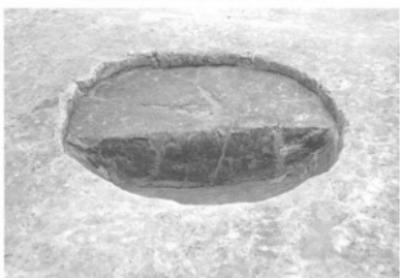
2. 柱穴6(ピット61・西から)



3. 柱穴1(ピット62・西から)



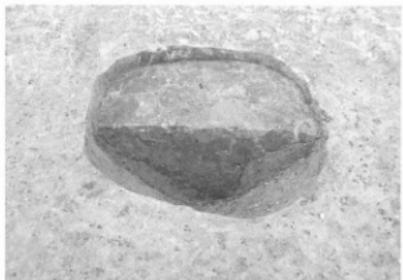
4. 柱穴4(ピット59・北から)



5. 柱穴3(ピット60・西から)



1. 全景(北西から)



2. 柱穴2(ピット84・西から)



4. 柱穴8(ピット82・西から)



3. 柱穴6(ピット81・北から)



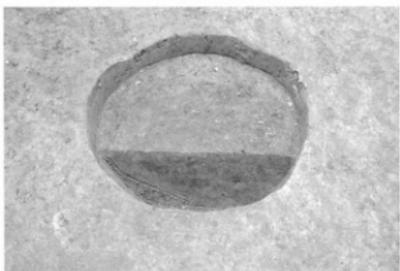
5. 柱穴1(ピット83・西から)



1. 全景(北から)



2. 柱穴1(ピット66・南から)



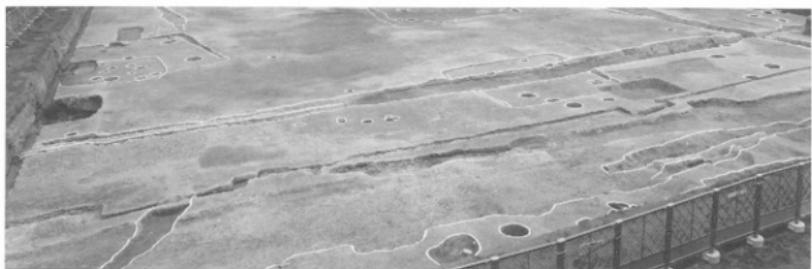
3. 柱穴2(ピット67・南から)



4. 柱穴3(ピット69・南から)



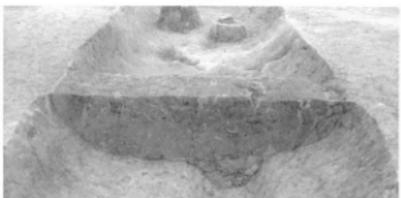
5. 柱穴4(ピット118・南から)



1. 全景(南から)



2. 近景(東から)



3. 畦2(東から)



4. 畦4(東から)



5. 遺物出土状況(第36図・南から)



6. 溝1・2交点遺物出土状況(第37図・東から)



7. 移動式竈出土状況(第37図・南から)



1. 全景(北から)



3. 畦1(北から)



4. 畦6(北から)



2. 北側部分(南から・右隣は溝8)



5. 畦3(南から)



7. 遺物出土状況



6. 畦4(南から)



1. 全景
(北から)



2. 溝1・3交点(北東から)



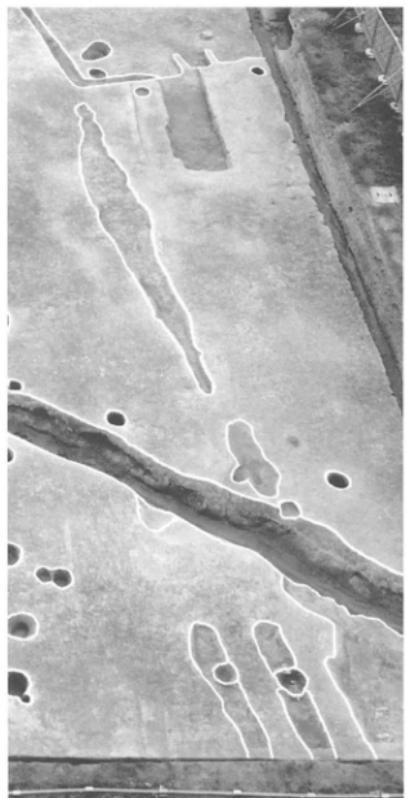
4. 畦1(南東から)



3. 近景(南東から)



5. 畦2(南東から)



1. 溝4・5・6 全景(北から)



2. 溝6 検出状況(北から)



3. 溝4 畦断面(南から)



4. 溝5 畦断面(南から)